特殊研 F-137

通常の学級の児童が障害について学び理解を深めるための教材と学習プログラムの開発

（課題番号：15730410）

平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金若手研究（B）

研究成果報告書

平成18年3月

研究代表者　久保山 茂樹

独立行政法人
国立特殊教育総合研究所
教 育 支 援 研 究 部

目　　次

研究組織

研究の趣旨及び目的 ---------- 1

研究の結果

研究１---------- 3

通常の学級の児童が障害について学び理解を深めるための
教材と学習プログラムの開発(1)
－障害疑似体験授業の構成－

研究２---------- 11

通常の学級の児童が障害について学び理解を深めるための
教材と学習プログラムの開発(2)
－６年間のまとめとしての高齢者体験学習－

研究３---------- 19

通常の学級の児童が障害について学び理解を深めるための
教材と学習プログラムの開発(3)
－通常の学級における特別支援教育へ向けての環境作り－

研究のまとめとして---------- 23

通常の学級における障害理解授業への提案

資　　料

Ａ小学校における生活科・総合的な学習の時間
「やさしさってなんだろうな」全体計画---------- 29

視覚障害体験授業の実施例---------- 31

「総合的な学習の時間」における障害体験学習の指導案

(1)視覚障害体験学習 ---------- 41

(2)聴覚障害体験学習 ---------- 47

(3)車いす体験学習 ---------- 53

(4)高齢者体験学習 ---------- 59

研究組織

研究代表者：

久保山 茂樹（独立行政法人国立特殊教育総合研究所　教育支援研究部主任研究官）

研究協力者：

豊田 弘巳　（東京都公立学校　通級指導教室教諭）

研究期間

平成 15 年度～平成 17 年度

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合　　計
平成 15 年度	１２００	０	１２００
平成 16 年度	８００	０	８００
平成 17 年度	７００	０	７００
総　　計	２７００	０	２７００

学会発表等

(1)学会誌等

・KUBOYAMA Shigeki & TOYOTA Hiromi:“Period of Integrated Study“ by Collaboration of Teachers in Tsukyu and Teachers in Ordinary Classrooms, NISE Bulletin, 8, 2005（印刷中）

(2)口頭発表

・豊田弘巳･久保山茂樹：総合的な学習の時間における通常学級と通級指導教室の協働Ⅳ－特別支援教育へ向けての環境作り－、日本特殊教育学会第 43 回大会発表論文集、642 頁、平成 17 年

・豊田弘巳・久保山茂樹：総合的な学習の時間における通常学級と通級指導教室の協働Ⅲ－６年間のまとめとしての高齢者疑似体験学習－、日本特殊教育学会第 43 回大会発表論文集、642 頁、平成 16 年

・久保山茂樹・豊田弘巳：障害理解を主題とする総合的な学習の時間の展開(1)－授

業の構成と児童の変容についてー、日本発達心理学会第 15 回発表論文集、464 頁、平成 16 年
・豊田弘巳・久保山茂樹：総合的な学習の時間における通常学級と通級指導教室の連携Ⅱ－障害体験学習の構成ー、日本特殊教育学会第 41 回大会発表論文集、593 頁、平成 15 年

研究の趣旨及び目的

障害のある子どもたちが通常の学級で学ぶための取組が、教育現場では様々な工夫とともになされてきた。加えて、平成16年障害者基本法の一部改正により「交流及び共同学習」を積極的に進めることが規定され、今後、障害のある子どもたちが通常の学級で学ぶ機会はさらに増加するものと考えられる。

ＷＨＯが提唱している国際生活機能分類（ＩＣＦ）の考え方によれば、障害は本人の心身機能の状況のみによって既定されるものではなく、施設・設備や機器等の物理的環境因子や周囲他者等の人的な環境因子によって変容しうるものである。したがって、障害のある人の生活の質を高めていくためには、本人の心身機能の改善ばかりでなく、環境因子の検討と改善が不可欠である。こうした考え方に立てば、通常の学級の子どもたちが障害について学び理解を深めておくことは大変重要であると言えよう。

そこで、研究代表者らは、障害理解を主題とする授業を、子どもたちが主体的に学ぶ時間である「総合的な学習の時間」に設定し２年間試行してきた（平成13・14年度科研費若手研究、久保山・豊田2002他）。

授業に参加した子どもたちは、当初「障害者はかわいそう」等という認識を示した。しかし、障害疑似体験を重ね、障害のある人と出会い、話を聞く中で、障害のある人が生活するための工夫等に気づくことができ、更に、少数ではあるが「障害があってもなくてもできることとできないことがある。できないことはお互いに助けあいたい」といった認識を示す子どもも出始めた。

この結果から、内容を精選した障害疑似体験教材の開発と、多学年にわたり長期的に展開される学習プログラムによって、通常の学級の子どもたちが、障害に関する理解を深め、障害のある子どもを互いに助け合う存在として認識できるようになるのではないかと考え、本研究を着想した。

障害に関する理解は単なる知識の獲得だけでは十分ではない。また単一学年で短期的に実施しても効果的な授業の展開は難しく、障害理解は深まらないと考えられる。そこで本研究では、小学校通常の学級の「総合的な学習の時間」において、障害に関する体験学習と体験発表を重視し、多学年にわたって重層的に展開される授業の構成を目指した。そのため以下のことを明らかにすることを目的とした。

１．下記の障害疑似体験教材を開発し、その効果を明らかにする。

- 視覚障害疑似体験
- 聴覚障害疑似体験
- 車いす使用疑似体験
- 高齢者疑似体験

２．学年ごとにどのような学習プログラム（教材、授業展開等）が適切であるか、明らかにする。

３．３年間にわたって展開される授業によって、児童の障害認識がどのように変容するかを明らかにする。

研究１

通常の学級の児童が障害について学び理解を深めるための教材と学習プログラムの開発(1)
－障害体験授業の構成－

Ⅰ．はじめに

筆者らは、小学校の通常の学級において、１年生から６年生まで６年間を通して展開する障害理解授業「やさしさってなんだろうな？」を試行中である。その中核となるのが、３年生から６年生までの「総合的な学習の時間」を利用した授業である。１学年につき１つの障害を疑似体験し、調べ学習を行い、障害のある人と対話をし、自らの考えを発表するという内容で、４年間で３つの障害と高齢者について学ぶものである。本研究では、これまでの実践を踏まえ、「総合的な学習の時間」で障害理解を扱う際の授業構成について検討する。

Ⅱ．方　法

１．授業のねらい

本授業のねらいは以下の２点であった。

①自分の周りには色々な立場や状況の人がいることを知り、自他の違いを正しく捉える。
（障害や高齢者の疑似体験、その人たちとの対話を通して不便な状態を知る。困っている人を目の前にして自分は何ができるか、どうしたいかを考える）

②相手を認め、やさしさについて考える。
（相手の立場や状況を判断し、その気持ちや行動を考える。世の中は「助けられたり助けたり」という関係で成り立っていることを知る）

２．授業の構成

(1) ３年生から６年生まで４年間の構成（障害体験の配列）

○視覚障害は、疑似体験が比較的容易に実施でき、障害への対応を考えやすいことから、初めての体験学習となる３年生に配当した。

○続いて、同じ感覚障害である難聴体験を４年生に配当した。

○車いすや高齢者体験は、ある程度の体力が必要で、安全面への配慮も必須であることから、高学年に配当した。

○特に、高齢者体験は各種の障害が複合するものであり、６年生に配当することによって、４年間の学習のまとめが行えるように計画した。

⑵ 障害体験授業の構成

すべての体験学習において以下の５つの内容で構成した

①障害に関する基礎知識を学ぶ

②十分に時間をかけて障害の疑似体験を行う

③体験を通して、障害のある人の暮らしや支援についての課題を設定し、調べ学習を行う。

④障害のある人や障害と関わりのある人に来校してもらい話を聞く

⑤体験内容や体験を通して自分が何を考えたか発表する（個人またはグループ）

（特に６年生では、どういう社会にしていきたいか、自分の考える「やさしさ」とはなにかを追求する）

⑶ 授業者の協働

授業に際して、通常の学級担任は、学級の特性や個々の児童の興味関心に応じた指導を行った。通級指導教室担当者と特殊教育研究者は、導入時の障害に関する基礎事項の学習、疑似体験の体験内容について発案と実施、記録等を行った。

また、小グループで学習を行うため、安全確保、体験補助、体験中の相談や支援などを、校長・教頭、専科教諭も担当した。更に、保護者には安全確保ために参加を依頼した。このことにより障害の理解学習が学校全体の学習としてより多くの人に身近なものとして認知された。

Ⅲ．授業の結果

１．車いす利用体験授業

⑴授業計画

実施した授業の例として、５年生の車いす体験の授業の流れを表１に示した。本授業は全体を 16 時間とし以下のように計画した。

・導入（車いすに関する基礎知識）（２時間）

・車いす利用体験とまとめ（６時間）

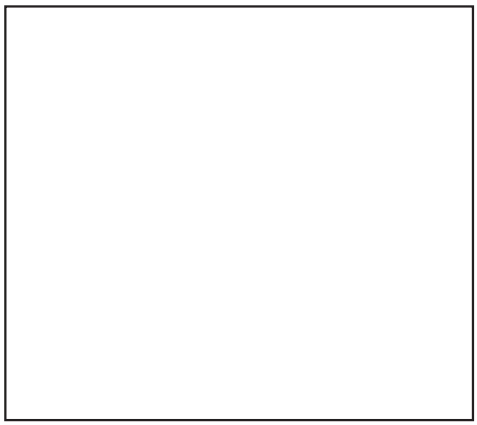
・課題発見と調べ学習（車いすの工夫、バリアフリーについてなど）（５時間）

・車いす利用者との出会い（自分たちの学習内容を利用者に伝え、話をうかがう）（２時間）

・まとめ（1 時間）

表１　　車いす体験指導の流れ

時数	内 容		学習の流れ	用意・依頼	場所
1	導入	昨年度の振り返り 車いす体験の実施について知らせる	昨年度をふりかえる。 やさしさについて考えてみよう。学習の流れを知る。 車いすについて知る。	今年の学習のながれ ppt車いすについて	PC室
2	知識	車いすを知ろう	車いすの扱い方に関する注意事項を確認する。 車いすに触れ、観察し、疑問点をだす。	取り扱い ppt 車いす 6 台 ワークシート 1	PC室
3 4	体験1	車いすにのってみよう（体育館コース）	安全な場所で実際に車いすにのり、動かしてみる。 様子をデジカメで撮影する。ワークシートに体験をまとめる。	車いす 6 台 ワークシート 2 安全管理者	体育館
5 6	体験2	車いすにのってみよう（外コース）	決められたコースを試乗する（全員）。 ・校庭裏庭長距離コース ・教室座席コース	車いす 6 台 安全管理者（保護者） ワークシート 3	校内
7 8	追体験	町にでよう	今までの体験に基づいて 学校の周りが車いすにとってどのような環境であるかを調べる。 デジカメを利用する。車いすを利用している人に対する質問を考える。	デジカメ。 安全管理者 ワークシート 4	校外 PC室
9	課題発見	課題をみつけよう	車いすに乗る人の立場になって、生活を考えよう。（自分で生活場面を設定する。） どのような場面に対してどういう工夫ができるか 調べ学習の見通しをたてる	ワークシート5 インターネット	PC室
10		中間発表	自分たちの課題と課題設定の理由、調べ方についての説明をする		
11 12 13	調べ学習	課題への取り組み。多様な方法でしらべながら発表方法を考える	体験をまとめる。車いすでの課題についてしらべる。まとめる。 方法・・・パソコン、壁新聞などの選択 必要な場所等発表に使う素材をデジカメ等を利用し集める。HP 等から発表の素材も収集し新聞作りを行う。	WEB 図の提示 デジカメ、パソコン、等、必要なもの	所定の場所
14	発表と確認	発　表	体験や調べ学習の要点（体験してわかったこと・感じたこと・疑問・調べてわかったことなど）を発表する。	プレゼンテーション関係一式	PC室等
15		車いすで生活している方と話し合い	車いすで生活している方をゲストとし、疑問を尋ねる。生活の様子についての話を聞く	車いすで生活をしている方に来校いただく	
16	まとめ	作文・まとめ	全体を振り返って わかったことや、やさしさについてを考え作文を書く。	作文用紙	学級



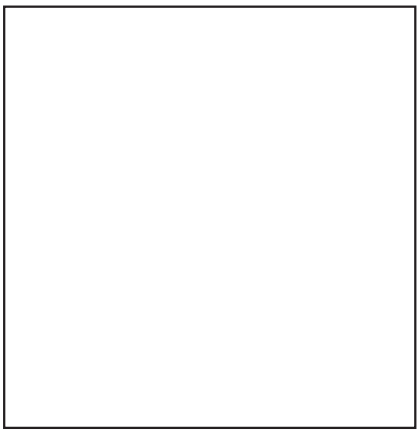
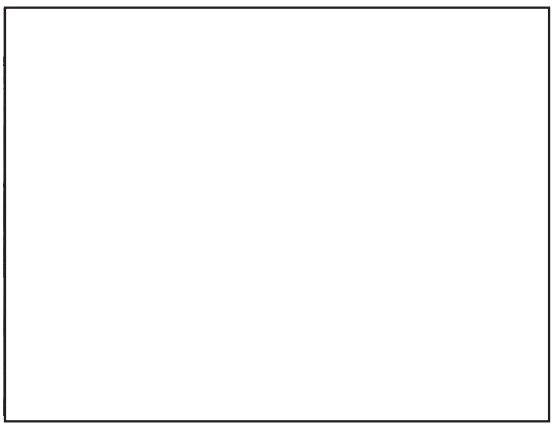
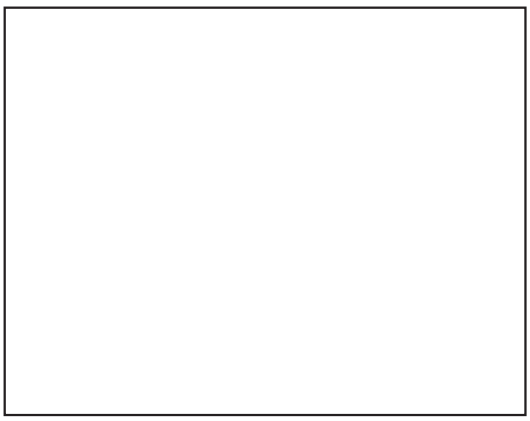


写真１　導入授業（車いすの基礎知識）





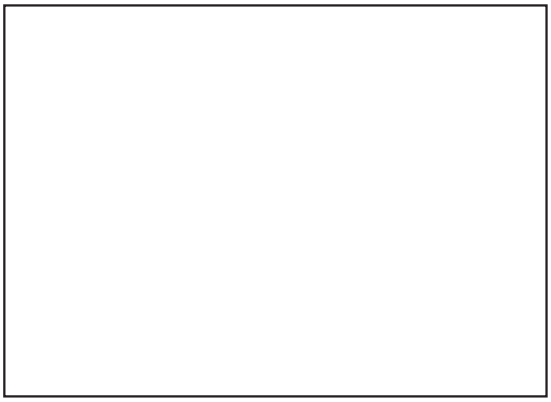


写真２　車いす利用体験

昇降口の開けにくいドア（左上）、前輪がはまってしまう（右上）

階段はおんぶして昇る（下）

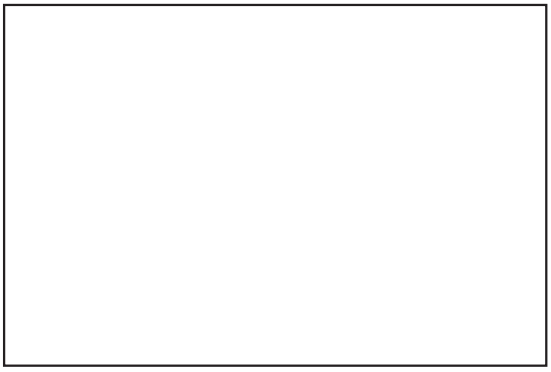


写真３　車いす利用者に学習内容を発表

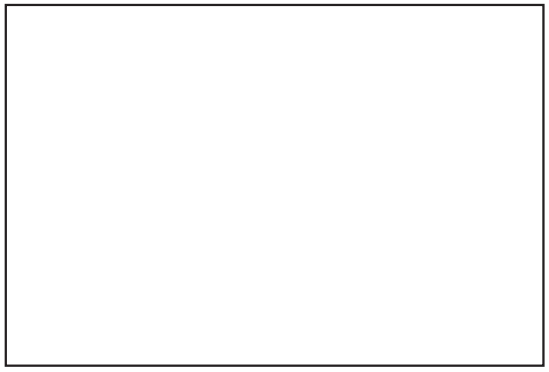


写真４　リフト付き自動車を知る

⑵ 授業の結果

ワークシートへの児童の記述から、授業結果として児童の変容を整理する。

①導入授業時の記述

車いすの構造や役割に関する記述が大半であった。

例）・タイヤの横についているのを回すとタイヤが動く

・けがなどをしている人が乗る

利用者の不自由さへの言及は少数

例）・一人でのるのは、けっこう大変

②疑似体験後の調べ学習の課題

疑似体験によって車いすの特性や不自由さへの気づき、解決策を模索していた。

例）・段差を一人で簡単にのぼれるような車いすがあるといい

・完全防水でタイヤが空回りしないような車いすがほしい

また、利用者をとりまく環境や利用者の日常生活への関心もひろがった。

例）・スーパーに車いす用のトイレは何個あるか

・買い物をするときどんな工夫をしているのだろうか

③車いす利用者への質問

車いす利用者への質問として以下のようなものがあった。

・日常生活動作や趣味に関する質問

着替え、入浴、スポーツ、旅行など

・利用者の立場に立とうとする質問

車いすに欠点があるとしたら何だと思いますか？

手伝いを頼んだとき無視されることがありますか？

④まとめに記述された内容

本授業全体のまとめとして以下のような記述があった。

・車いすの不自由さに対して道具による解決を考える

例)・もっと便利な車いす（小回り、軽い、長時間、安い）を作りたい

・いろいろなところにスロープをつけたほうがいい

・行動による解決を考える

例）段差で困っているときは声をかけてあげて、必要ならはこんであげる

・車いす利用者への想い

例)・○○さんは車いすにのっているのに、みんなと同じように明るく生活していて元気だと思った

・階段をどう上るかではなくて、どうやって階段をなくそうかという考え方も不便さを解消できるかもしれない

以上のように、授業開始当初、児童たちは車いすについてほとんど知識を持っておらず、利用者に対する関心も希薄であった。疑似体験によって車いすの特性や不自由さを知り、調べ学習で解決法を考えた。

車いす利用者と出会い、想像しなかった不自由さや、周囲他者の不適切な対応に気づく一方、利用者が自分たちと同じように主体的に生きていることを知った。

このように疑似体験と調べ学習を積み重ねた上で、車いす利用者と出会ったことによって、児童たちは車いすやその利用者に対する認識を深めると同時に、利用者に対し自分は何をすべきかを具体的に考えることが可能になったと考えられる。

⑶授業に参加した保護者の感想から

車いす利用体験では、安全確保と記録のために保護者に参加を呼びかけた。以下はそうした保護者の感想である。

百聞は一見にしかず、百見は一体験にしかず、と言う通り、この年にして始めて、車いす体験をさせていただきました。ホントにホントに小さな段も困難な壁で、時間がかかる事がわかりました。車いすだけでなく、松葉杖やベビーカーの人達も大変である事に子ども達は気づいたかな？今回はＡさんが車いすの時はＢさんが介護、Ｃさんはカメラという様に役割分担になっていたようですが、自分が介護役でない時は手を出さない子が多かったようでした。気がねや遠慮、出しゃばりたくないなどの感情は、大人も同様にありますが、これを上手く乗り越える指導法を期待したいです。週休二日制による子どもの学力低下とか、犯罪の低年齢化を言われたりしますが、私達が、小学生の頃はこんな種類の体験学習はありませんでした。こんな貴重な授業が、子ども達の心の片隅にしっかり残るであろう事は素晴らしいことだと思います。

２．授業構成について

他の学年の授業を含めて、障害理解授業の構成について検討を試みる。

児童たちは、前述した【障害体験授業の流れ】①の「障害に関する基礎知識」と②の「疑似体験」によって、障害のある人に対して「なにもできないのではないか」とか「かわいそうだ」と考え、障害に起因する困難さを大きく感じていた。

【感想例】「目がみえない人はジュースやコップに入れるときや、花に水をいれるときとってもふべんで、すごくかわいそうだな、と思いました」

「誰かいないと外にはでられない」

「年をとりたくない」

しかし、②の「疑似体験」を繰り返し行い、③の「調べ学習」を深めるうちに、障害のある感覚に代行する感覚の存在や、感覚や運動を補助する介助器具の存在や、その有用性に気づき始めた。

【発言例】「白じょうを使ってやったら、コースからはみ出ないで上手にできました」

「手話を覚えたい」

「足で走るよりも速い車いすがある」

さらに、④の「障害のある人の話を聞くこと」によって、子どもたちは、障害があっても生活のすべてが困難になるわけではなく､それぞれの生活を楽しんでいることも知った。

印象的な場面は多数あるが､中でも､視覚に障害のある人の｢海外旅行に行くのが好き。もう３０カ国行きました」ということばや、車いすを利用している人の「車いすサッカーで優勝したい」ということばに、子どもたちが目を輝かせ、思わず喚声を上げる場面もあった。筆者らも通常の学級の担任も、子どもらと共に学び、障害のある人に実際に会って話を聞くことの大切さを再認識した。

⑤の「発表」では、「困っていることは何でもやってあげる」「専用の歩道や車両などをつくる」といった、障害がある人を分離する意見感想も多く見られた。しかし、この学習を繰り返し経験した６年生の発表には、下記の例のように､「その人が本当に困っていることをしっかりと見て行動する」「私だったらどうしてもらいたいか考える｣などの考えも見られるようになった。

６年生の私が考えるやさしさ

私が考えるやさしさは、手足が不自由になったからといってベットにずっと寝かしていて、全てをやってあげる・・・。と言うのは、やさしさでは、ないし目の見えない人、耳の聞こえない人、車いすの人だからと言ってただ、声をかけたり、押せないボタンをおしてあげる・・。とかその人が求めて無いことをやってあげてもやさしさではないと思います。もし体の不自由な人が、助けを求めていたりしたら助けてあげる。その人を「助けよう」と思えることもやさしさだと思います。

Ⅴ．おわりに

本授業を継続的に実施することで、以下のことが明らかになってきた。

○障害の疑似体験は、障害に起因する不自由さや困難さを理解し、学習内容を焦点化する上で重要である。

○疑似体験には、十分に時間をかけることが大切である。子どもたちが、障害のある感覚や運動機能を代行する感覚や運動機能の存在、また点字、白杖や介助機器など、さまざまな工夫や支援があることに気づくまで行う必要がある。

○そのことによって、障害のある人に対して「何もできず、かわいそうな存在」また、「何かをしてあげる対象」として認識することの誤りに気づくことができる。

○疑似体験に加えて、障害のある人に実際に会い、疑似体験から得た疑問や調べ学習での疑問をぶつけ、話を聞くことにより、子どもたちが持つ、障害に関する認識が更に変容していく。

研究２

通常の学級の児童が障害について学び理解を深めるための教材と学習プログラムの開発(2)
－６年間の学習のまとめとしての高齢者疑似体験学習－

Ⅰ．はじめに

筆者らは小学校の通常の学級において１年生から６年生まで６年間を通して展開する障害理解授業「やさしさってなんだろうな？」を実施中である。本研究では、この学習プログラムで６年間学んだ児童たちに焦点をあて、最終の学習である高齢者疑似体験学習における児童の変容を報告する。

Ⅱ．方　法

１．本授業の６年間全体のねらい

本授業６年間のねらいは以下の２点であった。

①自分の周りには色々な立場や状況の人がいることを知り、自他の違いを正しく捉える。
（障害や高齢者の疑似体験、その人たちとの対話を通して不便な状態を知る。困っている人を目の前にして自分は何ができるか、どうしたいかを考える)。

②相手を認め、やさしさについて考える。
（相手の立場や状況を判断し、その気持ちや行動を考える。世の中は「助けられたり助けたり」という関係で成り立っていることを知る）

２．授業対象と５年生までの学習

授業対象はＡ小学校６年生全２学級の児童であった。

児童たちは１，２年生では道徳や生活科の時間において、日常生活におけることばやきこえの大切さを簡単な体験を通して学んだ。

３年生からは「総合的な学習の時間」において、各学年１主題（３年で視覚障害、４年で聴覚障害、５年で車いす体験）について学習を繰り返してきた。

各学年での学習は、【基礎知識の学習】、【障害疑似体験】、【調べ学習】、【障害のある人との出会い】、【まとめと意見の発表】の５内容で構成された。

３．６年生における高齢者疑似体験学習

(1)授業の構成

５年生までの学習と同様の５内容で構成した。

①高齢者に関する基礎知識を学ぶ

②高齢者疑似体験を行う

③高齢者の暮らしや支援について調べ学習をする

④高齢者施設を訪問したり、高齢者の方に来校してもらい話を聞く

⑤体験内容や体験を通して自分が考えたことをまとめ発表する。

表1　高齢者疑似体験学習計画

時数	ねらい		内容	指導担当	
				通常担任	通級担当
2	Aブロック	学習計画を知る	・本年度の学習のねらいと概要、進め方等について話を聞く	△	○
		高齢者に関する基礎知識を知る	・高齢者の定義、割合、身体的変化、心理的変化など、統計を基に話を聞く		○
1		既存の体験を基に自分で体験を組み立てる	・3年の視覚、4年の聴覚、5年の車いすで行った体験をもとに、自分で、高齢者体験器具を見ながら　疑似体験のねらいや数種類の疑似体験内容を考える	○体験内容の確認など	○体験器具の用意など
1日		一日体験を行う	・計画に基づき、登校時より下校時まで疑似体験を行う	○	
1		疑似体験に関するまとめを行う	・自分の行った体験をもとに、高齢者ができること　しにくいこと等についてまとめておく	○	△
3	Bブロック	デイケア施設の存在を知り見学をし通所高齢者との交流をする	・近隣のデイケア施設の概要について学び、話し合いの素材や道具を準備、持参し　通所している高齢者とかかわる時間を持つ	○話し合い素材や道具の用意等	○デイケア施設との渉外
2		学区内の老人会の方々と交流する	・児童5人に対して高齢者1人のグループで話合いを行う。校区周辺の変化の様子や、住みよい町についての話などへ発展させる。	○話し合い素材や道具の用意等	△管理職との調整
5		自分の考えをまとめる	・自分が高齢者になったらどうするか、またどうしてほしいか。・高齢者が生き生きと生活できる町とは？・今の自分にはどんなことができるか？自分の意見や考えをパワーポイントを使ってまとめる。	○	△
1		発表する	・プレゼンテーションを行う	○	△

指導担当欄の「○」は主担当を表し、「△」は副担当もしくは、記録担当を表す。

⑵手続き

授業の展開にあたっては、これまでに学習した知識や体験を生かせるよう、今年度、次のような新たな学習方法を試みた。

①疑似体験では、登校時から下校時までの「１日体験」をクラス内で数人ずつ（全体で一週間）を行う。

②疑似体験では、弱視ゴーグル、手袋、手足おもり、肘や膝の機能を制限する道具等を利用し、高齢者になったイメージを持って体験内容を組み立てる。

③疑似体験をしていない児童たちは、疑似体験中の児童の様子を観察し、体験中の児童の「help！」によって行動を助ける。

④高齢者とふれあう機会を２度設定する。

・デイケア施設を訪問し、通所される高齢者とのふれあいの時間を持つ(表２)。

・学区内の老人会の方々を学校に招き、高齢者の方と児童とが小グループにわかれ校内周辺の変化の様子や住みよい町作りについて話し合う。

⑤これらをもとに、住みよい町について考える。また、高齢者とのかかわり方について意見をまとめ、発表する。

表２　高齢者施設での学習活動内容

１．高齢者施設見学と施設担当者の方のお話

時間　10:00～10:30 頃

２．施設を利用されている高齢者との話し合い

子ども２名について高齢者の方１名、または、１名について１名

時間：10:40～11:00 頃

３．子どもたちの質問に対する担当者からのお話

時間：11:00～11:20　頃

(注意事項)

・プライバシーや身体のハンディに関わる質問はしない。

・自己紹介やお話を主とするが、トランプなどの簡単なゲームをも行う。
その際施設職員の方に援助していただく。

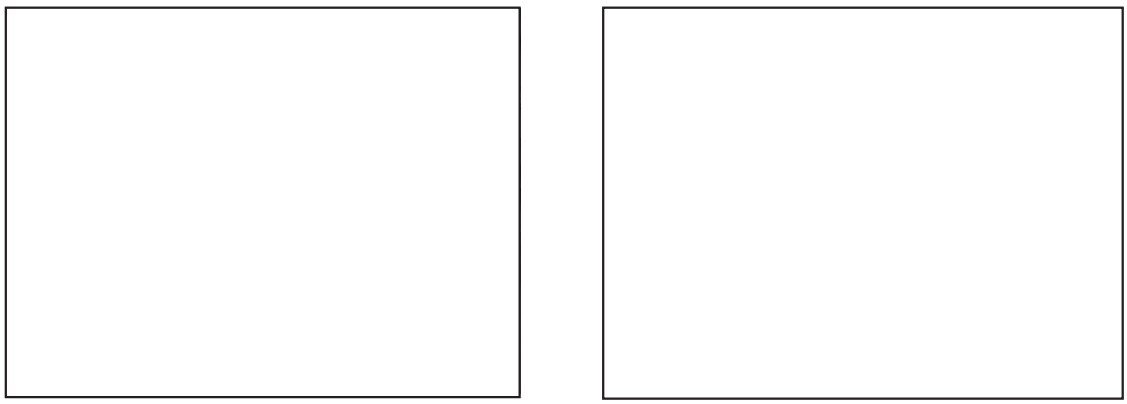


写真１　高齢者疑似体験
弱視ゴーグル、耳栓、軍手をして本を読む（左）
手首、足首に重りを、膝には動きを困難にする装置を装着し調理する(右)

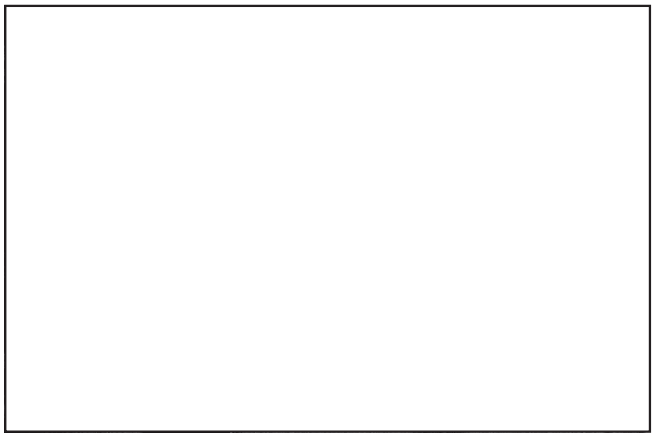


写真２　高齢者とのふれあい

これらの学習は、全体を約 15 時間で計画した。実際には、情報教育の授業時間とあわせて 20 時間以上を必要とした。

(3)授業者の協働

本授業の展開にあたっては、通常の学級担任が主体になり、学級経営に活かす授業構成や内容を模索した。特に、クラス内での「一日体験」やデイケア施設訪問、老人会の招待等は、通常の学級担任の発案によるものであった。通常の学級の担任は、筆者ら通級指導教室担当者主体の障害理解授業を２年間経験しており、それをふまえて、本授業に積極的に参加した。通級指導教室担当者は、導入時の障害に関する基礎事項の学習や疑似体験の体験内容について発案と補助、デイケア施設との連絡調整を行った。

Ⅲ．授業の結果

本授業では、毎時間後に児童たちにワークシートへ感想を記入してもらった。ここではその内容から、本授業の結果を検討する。

１．１日高齢者体験をして

児童たちは、疑似体験開始直後は体験を楽しんでいたが、長時間の体験で、不自由さや疲労を強く感じた。

記入例）・最初は楽しかったけれど、どんどん足は疲れて手はかさかさで自分の体じゃない様な気がした

また、長時間の体験のあと、体験をふまえ、高齢者の行動特性を理解しようとし始めた。

記入例）・高齢者が電車から降りるとき遅いなぁと思ったけどそれは仕方がないということがわかりました

・文字を読む時、顔を近づける事に納得しました

２．高齢者と接して

日頃、高齢者と接する機会が少ない児童たちが、高齢者と接した喜びを率直に表現下感想が多く見られた。

記入例）・高齢者の人は「こわい」というイメージがあったけど、遊んでみたら楽しかった

また、相手の反応を実感すること自分の気持ちも変わることを実感した。高齢者の方たちが一方的に「してあげる対象」ではなく、相互のやりとりを楽しむ相手であることに気づいた。

記入例）・最初はとまどっていたけれど、どんどんえがおになってくれました

・話したりしていると楽しくなってきて相手も楽しそうにしてくれたからうれしかった

３．未来の町のテーマ

学習のまとめとして、児童たちに「未来の町」についてキーワード１語で表し、その説明を求めた。

キーワードには「声をかける」「助ける」のように高齢者を一方的に支援対象とするものもあったが、「声をかけあう」「助け合う」「交流」をキーワードとし『高齢者も若い人も声をかけあいながら助け合うことが大切』『年老いても外で元気に遊んだり見ず知らずの人と交流できたりすればいいと思います』と記述するなど、同じ人間として相互に対等にかかわりあいコミュニケーションすることの大切さに言及した記述の方が多数見られた。

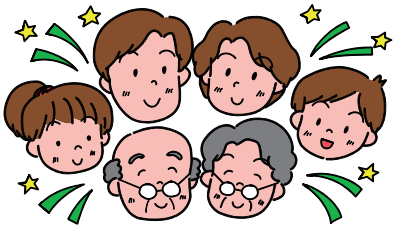
Ⅳ．おわりに

児童たちは６年間の学習のまとめとして、お互いのコミュニケーションの大切さを強調した。さらに言えば、高齢者と自分たちとの違いも知った上で、同じ人間としてのかかわりの大切さを述べたとも言える。

５年生までの学習では障害を軽減する道具や装置への言及が多数であったが、今回それは少数であった。その理由は、高齢者の方とコミュニケーションを楽しむ機会を得たことにあると考えられる。

また、その前提として、疑似体験を通して障害状況にある人の気持ちを考える学習や、障害のある人と出会って主体的に生きる姿に触れる経験を過去５年間繰り返してきたことが大きく影響していると思われる。

地域にお住まいのご高齢の方々との話し合い



日　時：平成17年2月15日（火）　3、4時間目

目　的：6丁目老人会の方々との話し合い
「私たちが住みよい町」について話しあう

今回は、「障害」という枠を取り外して話しあいましょう。
私たちは学校にいると　みんな同じ年代の人ばかりいるような気がします。
でも　実際はそうではなく、私たちの社会(町）は生まれたばかりの赤ちゃんから
100歳を超えるご高齢の方々まで、実に色々な人たちで構成されています。

初めに、ご高齢の方々と
「私たちだれもが住みよい町」ってどのような町かを話しあいましょう。
高齢者の方々は色々な意見を持っておられると思います。それを聞きましょう。

そしてそのことについて自分の意見や考えを話しあってみてください。
その時に頭の中で　以前勉強した三つの対策を思い出してください。
意見を出しやすくなると思います。
①医療（治療や薬）の進歩で対応できること
②科学技術（建物のつくり、町の作り、IT技術など、バリアフリーに関係するもの）
の進歩で対応できること。
③人と人とのつながり方で対応できること
話し合いの結果は裏のメモにまとめておいてください。名前を忘れないように。

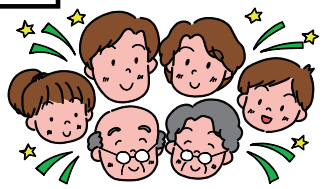
方　法：
3時間目は、高齢者の方々と仲良くなる時間にします。
おそらく子ども4人に対して1人の高齢者方が来てくださいます。
前回のデーケア施設ではせっかく用意してもらったものが使えなかったので、
今回はそれらをもう一度用意してください。
しかし、無理にその遊びをつかうのではなく、その場の雰囲気で高齢者の方々と
相談をして決めて下さい。
もしかしたら　高齢者の方は別のお考え（たとえば昔の鶴川の様子などを話して
下さるかもしれません）柔軟に対応して下さい。

4時間目頃からは、上に書いた「私たちが住みよい町」について話しあって下さい。
司会を決めておきましょう。

※高齢者と出会ったり、話し合いが終わったりするときは、挨拶をするのは当然の行動です。

地域にお住まいのご高齢の方々との話し合い

氏名：



Ⅰ.3時間目どんな方法で仲良くなったか。高齢者の方の様子をみてどう思ったか？

Ⅱ.4時間目について。

①高齢者の方々が望む「私たちにとって住みよい町」とはどのような町だったか？

②どのような意見を出し合ったか？

③この話し合いを通じて　あなたはどんなことを学びましたか？

研究３

通常の学級の児童が障害について学び理解を深めるための教材と学習プログラムの開発(3)
－通常の学級における特別支援教育へ向けての環境作り－

Ⅰ．はじめに

筆者らは、小学校の通常の学級において６年間を通して展開される障害理解授業「やさしさってなんだろうな？」を継続実施中である。本研究では、まず、この学習プログラムを継続実施する中で、通常の学級の担任が主体的に計画し主導的に取り組んだ授業について報告する。それを踏まえ、本学習プログラムが小学校で継続実施することが、特別支援教育へ向けての環境作りにどのような影響を与えたかについて、検討する。

Ⅱ．通常の学級の担任主導の学習

１．本授業の６年間全体のねらい

本授業のねらいは以下の２点であった。

①自分の周りには色々な立場や状況の人がいることを知り、自他の違いを正しく捉える。
（障害や高齢者の疑似体験、その人たちとの対話を通して不便な状態を知る。困っている人を目の前にして自分は何ができるか、どうしたいかを考える）

②相手を認め、やさしさについて考える。
（相手の立場や状況を判断し、その気持ちや行動を考える。世の中は「助けられたり助けたり」という関係で成り立っていることを知る）

このようなねらいを持つ本授業は、障害理解活動を通し、道徳教育の深化を図り、情報処理の基礎を培うねらいももっている。すなわち、障害に対する基礎知識や基本的な対応技能を習得する、人権尊重の精神を培う、自己認識と他者理解の基礎を学ぶ、情報機器操作と思考の柔軟活性化を図る、など６年間を一つのまとまりとして学ぶことが学習のねらいである。これらのねらいは、通級担当者としての障害理解のねらいだけでなく、通常学級担任の学級作り、学年作りのねらいとしても重要な位置をしめていると思われる。

２．「やさしさってなんだろうな？」における児童の変容

(1)各学年で学習する中での変容

これまでの研究の中で、児童たちは、本授業を各学年で学ぶ中で、以下のように変容し

ていくことがわかった。

障害による困難さを想像できない

→ 疑似体験後、障害のある人はかわいそう・大変との思いを抱く

→ 調べ学習によって困難さを解決するための工夫を知る

→ 障害のある人と出会い、すべてが困難ではないことに気づく

→ 誰にでも、できることとできないことがあることに気づく

⑵学習を繰り返す中での変容

また、本授業に繰り返し参加する中で（１、２年生は生活科、３年生以降は総合的な学習の時間)、児童たちは、「障害は軽減・克服すべきものであり、そのための装置は「専用」の仕組みが必要だ」と考えることに加えて、「障害のある人も、ない人も同じ人間であり、大切なのは、お互いのコミュニケーションを深めること」であるとの考えることができるようになった。

３．学級作りとしての「やさしさってなんだろうな？」

⑴5 年生Ａ教諭の車いす体験学習

①Ａ教諭の授業計画

Ａ教諭は、筆者らが実施してきた授業を、「集中講義・集中学習的」ととらえ、「知識のみの獲得になるのではないか」「実際に子どもが変容するのか？」との問題意識を持った。

車いす体験は、従来は 1 学期のみで終了していた。Ａ教諭は３学期にも授業を実施し、児童の学習意欲を再起し、６年生の高齢者擬似体験学習への橋渡しとした。Ａ教諭は本学習を２年間継続的に実施することで、児童の障害に対する気づきや、障害のある人の生き方への共感を深化させようと試みている。また、本授業を障害理解だけでなく、学級作り（共に生きる学級作り、人間関係の学習）にも活用している。

②授業の実際

Ａ教諭は、導入授業では、筆者らにインストラクションを依頼した。車いすの取り扱い方、車いす利用者の現状など一般的な知識を児童に提供するよう求めた。その後、Ａ教諭は、主導的に授業を展開した。１日につき数人ずつ児童が、１日車いすを用いて生活をする疑似体験を行った。疑似体験をする者。介護をする者。車いすを利用する者が教室にいる生活。これらを１週間以上続けた。そこでは　我々担当者が用意した短時間の疑似体験では学べない日常の生活での不便さ、不自由さ、そして車いすが教室にある生活などを学ぶことができた。

３学期には、車いすで生活をしている方を学級に招き、児童たちとの対話の時間をもうけ、給食をともにしたりした。また、車いすを乗せるリフトカーなどを見学し、みんなに

やさしい町作りのテーマを児童もたちに提示し、６年生での高齢者体験へと課題を提示した。

③授業後

児童たちは、A小学校が車いすの利用に問題の多い場であることを実感し、車いすの生活の不便さについて理解を深めた。

しかし、車いす利用者との出会いから「車いすで生活する人たちはスポーツを楽しんだりすることもでき、必ずしも不幸とは言えないと思う」等の感想を述べていた。

⑵ ３年生Ｂ教諭の視覚障害体験学習

Ｂ教諭は、本学習のねらいの一つである「つたえる」に焦点をあてた。

Ｂ教諭は、やさしさの学習を踏まえ、作文指導を通して　児童の気持ちや考えを内面化させ、文章で表現する学習を行った。毎時間の学習後、児童の気持ちを短い文章で表現させ、それらをつみかさねて、最後にまとめの文章を作成した。

学習した１時間１時間の状況が子どもたちの中に内面化されており、「こどもの気づきを引き出す」「相手の立場を考える」という本学習の目的に迫る文章や詩が多くの子どもたちの表現にみられた。

児童の作文からは、疑似体験をすること、更に体験に基づいて障害のある人との話し合うという学習の流れが重要な過程であることが確かめられた。また、学級通信などで児童の作品を紹介し保護者にも本学習への取り組みを伝えたことは、本学習に関する理解を促進した。

Ⅲ．特別支援教育にむけての校内組織作り

１．通常の学級と協働する通級指導教室

総合的な学習における障害の理解啓発授業は、当初通級指導担当者主導であった。しかし､本報告のように徐々に通常の学級の担任主導へと変化している(図１)｡その背景には、役割分担が明確になってきた事実が存在する。学級づくりは担任の重要な仕事である。それぞれの担当者がその持ち味を生かし、障害の理解啓発授業に取り組める担当者としての学びが育ってきたものと思われる｡しかし､その一方でより専門的な内容や障害がある方々との連絡調整に関しては通級指導担当者との協働が必要と認識されるに至っている。

この考え方が特別支援教育の実施にあたっても般化され、どの学級にも存在する発達障害を初めとした特別な支援を必要とする児童たちの相談先として通級指導教室担当者が必要とされている。総合的な学習で全クラスに入り込む通級指導担当者の関係は　そのまま子どもたちにも違和感なく該当児童の観察に入ることが出来る。

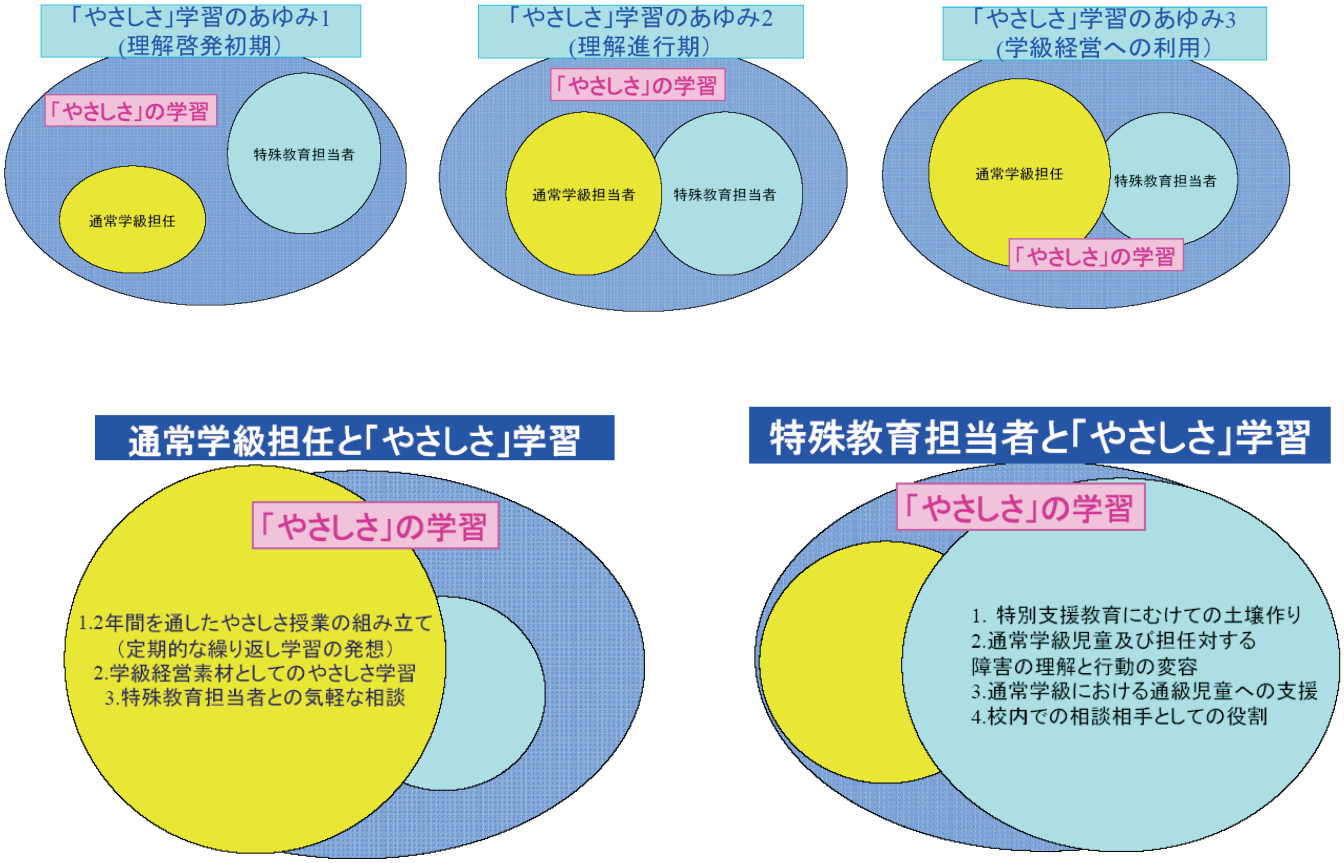


図１「やさしさってなんだろうな？」学習のあゆみ

２．小規模校における校内委員会の模索

各学年２学級全校 12 学級の本校では人的リソースを考えるとコーディネーターを中心とした校内委員会の独立した設置ときめ細かな活動は難しい。

そこで教育相談部会と校内委員会を併せた組織を設置することで、いわゆるグレーゾーンを含めた様々なニーズのある児童への対応を可能にした。このような組織設置には、上述の経緯により職員の理解が大きく関与したことが背景にあると考えられる。

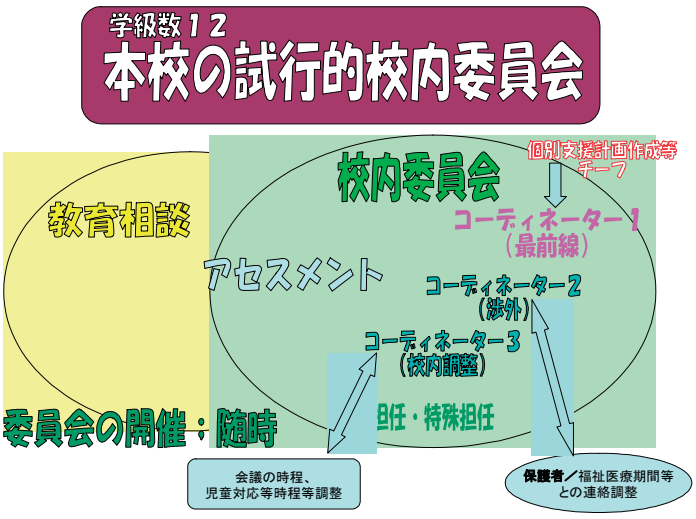


図２　小規模校における校内委員会の模索

研究のまとめとして

通常の学級における障害理解授業への提案

１．はじめに

平成 16 年６月に障害者基本法が改正されました。その中に「国及び地方公共団体は、障害のある児童及び生徒と障害のない児童及び生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによってその相互理解を促進しなければならない（第１４条３項）」という条項が加えられたことは、ご承知のことと思います。

これまでも、さまざまな教育的ニーズのある子どもたちが通常の学級で学ぶ機会が増えつつありましたが、この条文によって「交流および共同学習」はますます推進されることになるでしょう。障害のある子どもとない子どもとがふれあい、学び会うことは、子どもたちの児童生徒の生活世界を豊かにし、人格形成にも大きな影響を及ぼすものと思われます。

障害の有無を越えてこどもたちがつながりあうためには、その土台（下準備）作りが必要だと思われます。筆者らは、その方策の一つとして障害を理解する授業にとりくんでいます。以下に東京都の小学校で通級指導教室を担当している豊田弘巳先生と約 10 年間実施してきた共同研究を紹介します。

２．障害理解授業を行うにあたって

当初は通級指導教室を紹介する授業として展開しました。しかし、総合的な学習の時間が導入されたことを契機に、様々な障害をテーマとし、学校全体の取り組みとして継続的に実施してきています。

授業を通して筆者らは、子ども達に対して**「障害があると不便な事があるかもしれないが、必ずしも不幸ではない」**ということを実感してほしいと願ってきました。これを具体化するため、授業の実施において以下の２点を重視してきました。

①障害体験できることはとことん体験してみる（しかし「体験」には限界もある）
②障害のある人と出会い、自分たちの考えを伝え、話を聞く

①は、障害があることを前提として、それではどのような工夫が考えられるかを十分な体験を通して気づく場となります。また、②は、体験では得られない障害のある人の暮らしの実際や思いを学ぶ場となります。これら２つの内容は障害理解学習では絶対にはずせないと筆者らは考えています。

中途半端な障害体験は障害のある人が「かわいそう」「たすけてあげよう」などといった、一方的に支援する対象であるかのような誤解を、子ども達に持たせただけで終わってしまう可能性があります。

また、障害のある人との出会いがないと、障害のある人たちが主体的に生きている姿を知ることができません。その一方で、十分な障害体験をせずに障害のある人の話を聞くだけでは、その人の過去の努力や苦労に思いをめぐらすことができません。さらに、障害理解授業を行うことは授業担当者が障害をどのように捉えているか、つまり障害観を問われることにもなります。

筆者自身は、これまでに出会った障害のある人たちやその生き方を想起しつつ、考えを深めていこうと努めてきました。加えてWHOが提唱した国際障害分類（ＩＣＨＤＨ:1980）やそれを改訂した国際生活機能分類（ＩＣＦ:2001）等の考え方やめざすものを通して「障害とは何か」を問う姿勢が授業者には必要だと思われます。

３．障害理解授業の実際

ここで紹介するのは、豊田先生が勤務する小学校において、１年生から６年生まで６年間を通して展開される障害理解授業「やさしさってなんだろうな？」です。中核となるのは３年生から６年生までの総合的な学習の時間を利用して展開する授業です。

表「やさしさってなんだろうな」６年間の計画

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
指導時数	2～4時間	2～4時間	15時間	15時間	15時間	15時間
実施時期	3学期	2学期後半	1学期前半	2学期前半	1学期後半	3学期
学習題材	ことばあそび	ことばあそび	視覚障害体験	難聴・言語体験	車イス体験	高齢者体験
学習のねらい	・きく・はなす・伝えることのたのしさを知り、伝わらない不自由さ、わからない不安感をしる。（コミュニケーション・情報伝達障害）		・視覚障害の知識や体験を通して、障害による不自由さと不自由さに対する生活上の工夫について知る。	・コミュニケーション障害の知識や体験を通して、障害がある人の存在を知る。 ・6年生までの学習内容について概観する	・車イスでの校内探険を通して、自分が車椅子でですごすとしたら、どのような工夫が必要か考える。	・高齢者の体験をすることにより、自分たちの町の、バリアフリー対策について知る。 ・自分たちの町をどんな町にしたいか、夢を語る。
主な活動内容	1.しりとりあそび 2.限定しりとりあそび（ことばの障害体験） 3.うまく言えないと生活が不便	1.口ぱくビデオで難聴体験。 2.きこえないことの不安やいらいらを知る 3.どんなときにこまるかな？どうすればいいのかな？	1.視覚障害について話し合う 2.折り紙、ボールキャッチ、歩行、衣服の着脱等の疑似体験と調べ学習（生活の工夫）。 3.まとめ：体験・調べ学習による疑問点について盲の人に尋ねる。 4.盲についての知識を知り、なにができるか考える。	1.口ぱくビデオで難聴体験 2.きこえやお話の仕組みについて知る 3.補聴器って知ってる 4.吃音についてしる。しりとりで体験。 5.難聴の人、吃音の人の気持ちについて考えよう。 6.なにができるだろうか 7.他の障害があることについて知る	1.車イスはどんな人がつかうのだろうか。 2.車イスについて想像してみよう。 3.車イスにのってみよう。 4.車イスで校内探険をしよう。 5.車イス介助の仕方を考えよう。 6.車イスにとってどんなところが不便だっただろうか。 7.学校や町ではどんなくふうがあるか。 8.わたしたちにできることはなんだろう？	1.高齢者になるとどうなるのだろう。 2.高齢者の体験をしてみよう。（高齢者疑似体験セット） 3.テーマ（自動車、駅、建物、町・・）をみつけ、バリアフリーについて調べよう。 4.そのテーマをもとに自分ならどんな工夫をほどこすか夢を語ろう。 5.ユニバーサルデザインについて知ろう。 6.「やさしさってなんだろう」を話し合おう。
留意事項	・本授業を通してコミュニケーションの基本（【聞く・話す・話し合う】の基本姿勢）を身につける			・本授業を通して学習の仕方を身につける（【知識を得る→体験する→考える→まとめる→伝える→話し合う】の過程を重視）		

⑴ 授業の全体構成

３年生で視覚障害、４年生で難聴、５年生で車いす、６年生で高齢者という順序で、体験学習を配列しています。視覚障害は体験が比較的容易に実施できることから、初めての学習となる３年生で実施します。続いて同じ感覚障害である難聴を４年生で実施します。車いすや高齢者体験には体力が必要で、安全面への配慮も必須であることから、高学年で実施します。高齢者体験は障害が複合するものであるため６年生に配当し、学習の総まとめが行えるように計画しています。

⑵ 授業の流れ

全学年の学習で５内容を含んでいます。

①障害の基礎知識を学ぶ

②十分に時間をかけ障害疑似体験を行う

③障害のある人の暮らしや支援について調べ学習をする

④障害のある人に学習内容を報告し話を聞く

⑤学習を通して何を考えたか（どういう社会にしていきたいか等）を発表する

⑶ 子どもたちの感想と学びから

授業の展開に沿って子どもたちは、以下のように変容していくことがわかりました。

段階１：関心が希薄な段階。授業開始直後で「耳の聞こえない人は点字を使う」と言うなど目と耳を混同していたり、車いすの構造のみに興味があったりする時期（授業の流れ①）。

段階２：障害に起因する困難さにのみ注目する段階。疑似体験の開始直後で「見えないとこわい」「かわいそうだ」「耳が聞こえてよかった」などと発言する時期（授業の流れ①②）。

段階３：代行感覚の存在や介助器具等の有用性に気づき始める段階。徹底した疑似体験の繰り返しと調べ学習によって子どもたちの感想が大きく変容する時期である（授業の流れ②③）。

段階４：主体的に暮らしている人の存在を知り学び直す段階。障害のある人と直接対面しその生き様に触れる。視覚障害のある人の「海外旅行に行くのが好き」、車いすを利用している人の「車いすサッカーで優勝したい」ということばに、目を輝かせ、喚声を上げる子どもたち。障害があっても生活のすべてが困難になるわけではないことを知り、障害がある人への認識を変え始める時期。また、「誰にもできることとできないことがある」といった感想も出はじめる時期（授業の流れ④）

段階５：バリアフリーの視点で考える段階。「段差をなくす」「点字ブロックを増やす」という現実的なものから「街中を動く歩道にする」「高齢者専用車両を作る」など実現性に欠けるものまであるが、子どもたちはみな真剣に考える。他方、障害がある人の為にしてあげるという意見が多い段階（授業のながれ⑤）。５年生までに多い。

段階６：コミュニケーションを重視する段階。「助けてあげる的バリアフリー」から考えを改め「まず声をかけて話をする」や「その人が本当に困っていることをしっかりと聞いて行動する」など、相手の立場に立とうとする段階。学びの最終段階。

５　おわりに・・・授業のユニバーサルデザイン化

このような態度変容は、児童生徒ばかりではなく教師にも求められると思います。筆者らは、写真のような聴覚障害体験セットを用いて、こどもたちの半数が聞こえないという状態を作り、通常の学級の担任に授業をしてもらう試みをしています。子どもたちがセットを装着したとたん、授業は滞ります。

この状態で授業を進めるにはどうしたらよいのでしょう。子どもたちに発言を求めてみます。「教科書のどこを読んでいるか指で指す」「あてるときは相手（子ども）の目を見る」「黒板を向いたまま話さない」など具体的な提案が、即座に、多数挙げられました。これらの提案が、日々実行されるならば、聴覚障害のある子どもがその学級で学ぶことも容易になるでしょう。また、障害のない子どもにとっても参加しやすい授業になることはいうまでもありません。こうした取り組み、すなわち、全ての子どもにわかりやすく、参加しやすい授業作りは、「授業のユニバーサルデザイン化」と呼ばれますが、今後、特別支援教育の進展とともに、すべての学校、学級ですすめていくことが大切だと思われます。

おわりに

本研究は、東京都内Ａ小学校において平成 11 年度から途切れることなく継続的に実施されている障害理解授業「やさしさってなんだろうな？」のうち、平成 15 年度から平成 17 年度までの授業研究をまとめたものである。平成 11 年度から平成 14 年度までの取組については科学研究費補助金若手研究（Ｂ）「通級指導教室と通常の学級との連携による『総合的な学習の時間』の展開」として平成 15 年 2 月に報告書にまとめた。その段階ですでに６年間一貫した学習プログラムとしての骨格と、はずすことのできない要素についてはかたまりつつあった。本研究では、これまでの研究成果の深化と精選をめざしたが、実際にはこれまでの成果の再確認というレベルに終わってしまった感があり、力不足を痛感している。

しかしながら、この３年間Ａ小学校の先生方は非常に前向きに、積極的に筆者らの提案に向きあい、授業を展開された。授業に際し、先生方から向けられる質問には障害児教育の核心をつくようなものもあり、驚きながらも丁寧に答える努力をしてきたつもりである。児童の皆さんも大変意欲的に学習に取り組んで下さった。初めてのアイマスク着用で不安を持ちながらの体験、梅雨時の蒸し暑さに耐えながら車いすで外出した体験など、一つひとつの体験に真摯に取り組み、少しでも障害のある人の気持ちを探り、想像し、共感しようとして下さった。

ゲストとして授業に参加してくださった方々は、子どもたちの質問に一つひとつ丁寧にわかりやすく答えて下さった。もちろんこうした授業としての場面も心に深く刻まれているが、筆者が大好きなのは授業終了後のゲストの方々と子どもたちとのふれあいの場面であった。「握手してください」「サインしてください」「一緒に写真とってください」など、子どもたちは、ゲストの方々との出会いを率直に喜んでいた。こうした経験の積み重ねは、６年生が高齢者の方々に話しかける時、「自然にしゃがんで相手の目線よりも下から笑顔で話しかける」という美しい姿として見事に結実していた。

さらには、体験授業において欠かせない安全確保のために、多くの保護者の方に参加していただいた。用務主事の方々には体験で汚れてしまった廊下や車いすの清掃、体験器具の補修など見えないところでご尽力いただいた。心から感謝申し上げる。

最後に、研究協力者として、また教育の世界の大先輩として常に筆者を導いて下さる豊田弘巳先生に改めてお礼を申し上げ本研究のまとめとしたい。

平成１８年３月

久保山茂樹

資　料

１．Ａ小学校における生活科・総合的な学習の時間
「やさしさってなんだろうな？」全体計画

２．視覚障害体験授業の実施例

３．「総合的な学習の時間」における障害体験学習の指導案
(1) 視覚障害体験学習
(2) 聴覚障害体験学習
(3) 車いす体験学習
(4) 高齢者体験学習

A小学校における生活科・総合的な学習の時間「やさしさってなんだろうな？」　全体計画（2004年度）

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
指導時数	2～4時間	2～4時間	15時間程度	15時間程度	15時間程度	15時間程度
実施時期	3学期	2学期後半	2学期後半	2学期前半	1学期後半3学期2月	3学期
学習題材	ことばあそび	ことばあそび	視覚障害体験	難聴・言語体験	車イス体験	高齢者体験
学習のねらい	・きく・はなす・伝えることのたのしさを知り、伝わらない不自由さ、わからない時の不安な気持ちを知る。（コミュニケーション・情報伝達障害）		・視覚障害についての知識を学び疑似体験を通して、障害がある人の存在を知る。視覚障害があることによる不自由さと不自由さに対する生活上の工夫について知る。	・聴覚障害についての知識を学び疑似体験を通して、障害がある人の存在を知る。 聴覚に障害があると自由なコミュニケーションがとりにくいことがわかる。	・車イスの観察や校内擬似利用体験を通して、自分が車椅子ですごすとしたら、どのようなことが不自由で、どのような工夫が必要か考える。また　あわせて私達が考えられることは何かについて討議する。	・３年間学んできた疑似体験を基に、高齢者疑似体験を組み立て、実際に行う。 ・定められた観点に基づき、解決の糸口を探る。 ・「やさしさ」に対する自分の考えをまとめ発表する。
主な活動内容	1. しりとりあそび 2. 限定のある（さ行音不可、か行音不可など）しりとりあそび→ことばの障害体験 3. うまく言えないと生活が不便	1.口ぱくビデオで難聴体験。 2.きこえないことの不安やいらいらを知る 3.どんなときにこまるかな？どうすればいいのかな？ 4.絵をみながら　町の中にある工夫について探し、考える。 5.3年生から6年生までの4年間で行われる、やさしさの授業について簡単に予告する。	1.視覚障害について簡単　な知識を知ろう。 2.折り紙、ボールキャッ　チ、歩行、衣服の着脱　等の疑似体験を行い、　不自由さを知ろう。 課題に対して調べ学習を行う。生活上の工夫について調べよう。 3.体験や調べ学習によってできた疑問点について全盲の方に尋ねてみよう。 話をうかがおう 4.視覚障害についての知識をさらに知り、なにができるか考える。	1.ビデオで難聴の方の話　を聞く。発音ついて学ぶ。 2.きこえやお話の仕組みについて知る 3.『補聴器って知ってる』ビデオで学ぼう。 4.疑似体験を行い、難聴　のある人の不便さや気持ちについて考えよう。 5.体験や調べ学習によってできた疑問点について聴覚障害のある方に尋ねてみよう。話しをうかがおう 6.難聴についての知識をさらに知り、なにができるか考える。	1.車イスについて想像しよう。 2.車イスを観察し、実際にのってみよう。 3.車イスで校内探険をしよう。介助の仕方を考えよう。 4.車イスにとってどんなところが不便だっただろうか。 5.学校や町ではどんなくふうがあるだろうか。 6.実際に車いすで生活をしている方に、学習の成果を報告しよう。話をうかがおう。 7.わたしたちにできることはなんだろう？	1.高齢者に関する基礎知識を学ぶ。 2.今まで学んだ体験をもとに、高齢者の疑似体験を組み立てて、体験をしてみよう（ミニもみじ箱セットなど使用）。 3.体験から課題をみつけ、調べ学習を行おう。 4.学習や現状に基づき、自分なら将来どんな工夫をするか夢を語ろう。 5.「やさしさってなんだろう」小学校時代の自分の見解（意見）をみんなに伝えよう。
留意事項	・本授業を通してコミュニケーションの基本（【聞く・話す・話し合う】の基本姿勢）を身につける			・本授業を通して学習の仕方を身につける（【知識を得る→体験する→考える→まとめる→伝える→話し合う】の過程を重視）		

視覚障害体験授業の実施例*)

１．視覚障害体験授業の概要

(1)授業のねらい

「総合的な学習の時間－やさしさってなんだろうな？－」の６年間を通してのねらいは以下の２点である。

①自分の周りには色々な立場や状況の人がいることを知り、自他の違いを正しく捉える（障害や老人の疑似体験や話を通して不便な状態を知る。また、困っている人を目の前にして自分は何ができるか、どうしたいかを考える)。

②相手を認め、やさしさについて考える（相手の立場や状況に立ちその気持ちや行動を考える。また、世の中は「助けられたり助けたり」という関係で成り立っていることを考える)。

視覚障害の理解を主題とする本授業では上記をふまえ、「視覚障害の知識や体験を通して､障害による不自由さと不自由さに対する生活上の工夫について知る」をねらいとした。

このねらいの達成には、疑似体験を十分に行うこと、体験後、児童一人ひとりが自分の考えを記録し発表すること、障害のある人の話を聞くことが必要であると考え授業計画を立案した。

(2)手続き

本授業の実施学級はＡ小学校の第３学年全２学級及び第４学年全２学級、合計４学級であった。このうち本稿では、モデルケースとして、筆者ら（特殊教育研究者１名と通級指導教室担当教諭１名）が数多く関与した第４学年のＢ学級について論ずることとする。

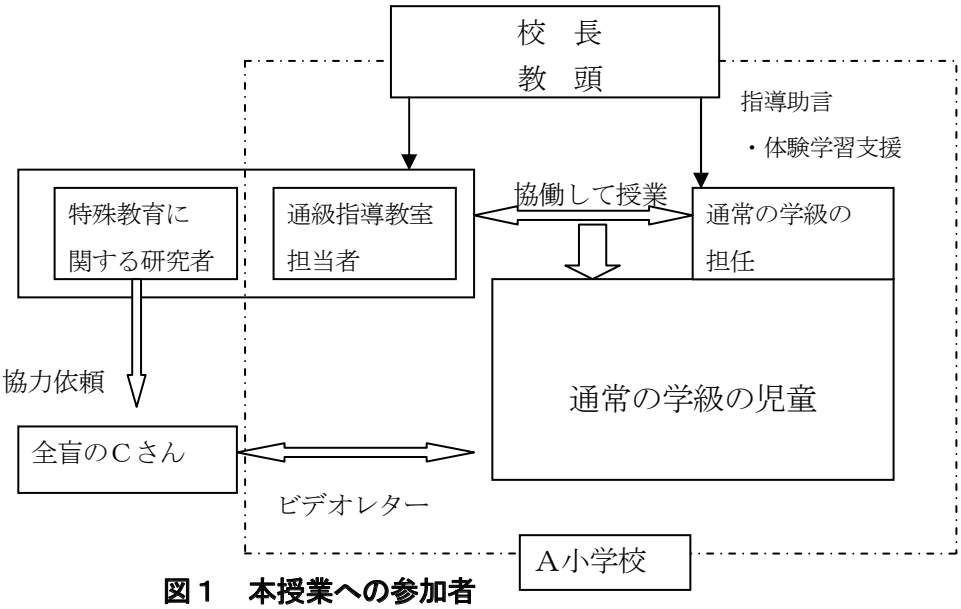


図１　本授業への参加者

*)本授業例は平成 13～14 年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書「通級指導教室と通常の学級との連携による『総合的な学習の時間』の展開」に掲載したものの一部を修正したものである。

本授業への参加者について図１に示した。主たる授業者は、通常の学級の担任教諭１名と筆者らであった。体験授業においてはグループ別学習の支援や安全確保のため、他学級担任や校長、教頭も随時参加した。

(3) 指導案作成

まず、筆者らが指導案素案を作成した。全授業者で協議したのち、通常の学級の担任は、授業のねらい、体験内容や児童への発問内容の吟味を行った。これを受け、筆者らは、先行研究等を検討し、専門的知識の収集と提供、体験内容の具体化を行った。さらに、通常の学級の担任は、体験内容と担任する学級の特性との照合及び検討を行った。この作業には約１ヵ月半を要した。

(4) 授業の構造

Ａ小学校当該学年における「総合的な学習の時間」の年間計画のうち、本授業は 15 単位時間前後（学級により増減）を使用した。単位時間の内訳と授業の構造を図２に示した。

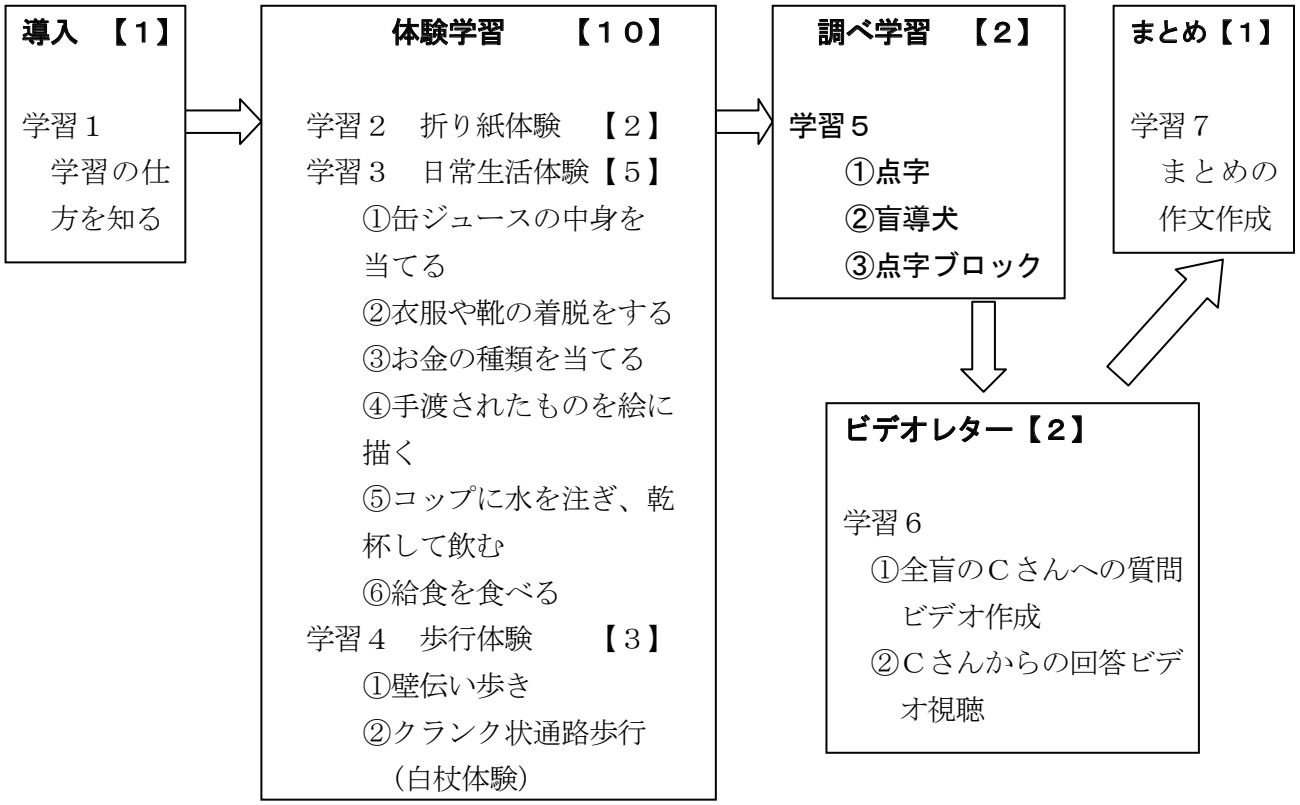


図２　本授業の構造（【　】内の数字は単位時間数）

本授業は図２に示したように体験を重視したものであるが、体験の単純な繰り返しに終始しないよう留意し、児童の学習の仕方を図３のように設定した。

それぞれの体験学習ごとに、①体験に関連する知識を学ぶ、②体験する、③体験結果について考える・まとめる、④それらを発表しあい共有する、を行った。そのことにより新たな知識や疑問を持ち（再び①にもどる）、次の体験に臨むという過程を、繰り返すように

した。こうした学習の仕方により、体験ばかりではなく、他者の説明や話を聞く、自分の考えをまとめて話す、といったコミュニケーション能力の育成も重視することにした。通級指導教室の担当者はコミュニケーションを専門としており、通常の学級に対してこの点からも貢献できると考えた。

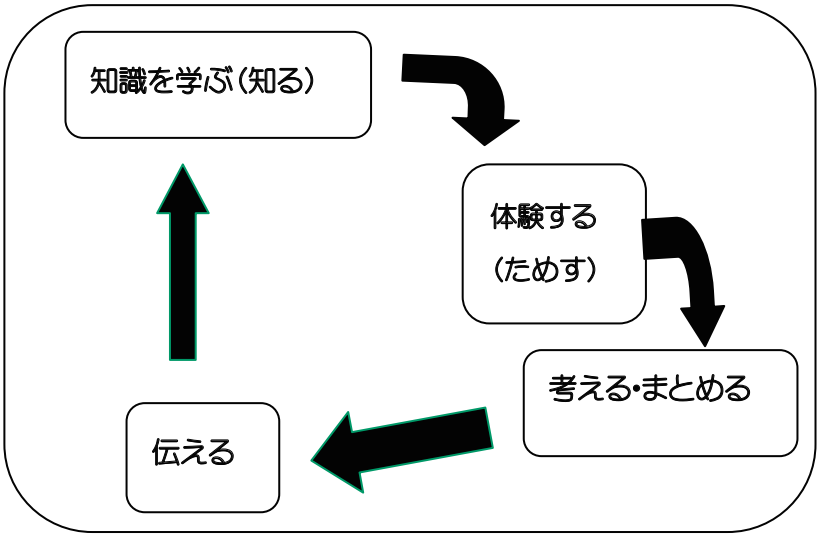


図３　学習の仕方

また、全ての体験学習についてワークシート（図４参照）を準備し、児童一人ひとりに記録させた。これらのワークシートは卒業時まで保存・蓄積（Ｂ学級の児童では、第４学年から第６学年までのワークシートを１冊のファイルに保存することになっている）し、自らの成長や学習の過程を振り返る材料とすることにした。

２．授業の内容

(1)学習１（導入、１単位時間）【筆者らが主担当】

児童たちに、「目の役割は何か？」「目が見えなくなったとしたらどのような生活になるだろうか？（学校では？　家では？　外では？）」「視覚に障害のある人の生活への工夫にはどのようなものがあるだろうか？」と問いかけ、話し合うことによって、視覚に関する興味や視覚障害に関する課題意識を高める。併せて今後の学習の仕方と実施計画について説明する。その際、安全の確保について児童たちに十分周知する。見えなくなる体験は貴重であるが同時に、普段見えている者にとって非常に危険な体験でもある。特に登下校時など屋外では絶対に目をつぶったりアイマスクをして歩行しないこと、疑似体験は一人で行わないことなどを徹底して伝える。

(2)学習２（体験学習１：折り紙、２単位時間）【通常の学級の担任が主担当】

目が見えない状態で折り紙を折ってみる体験である。折り紙で「さいふ」をアイマスク無し・有りの順で折る。それぞれの所要時間を計測して比較する。アイマスクをした時の困難さや試みてみた工夫及び感想などをワークシートに記入する。ワークシートに記入したことを発表する。

生活体験ワークシート６（グルメ 体（たいけん） 験 ）

年　　組　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

たっぷりめしあがれ！

1. アイマスクをして食事をするとどんなことが困ると思う？

2. どんなふうに体験しましたか。教えてください。

3. 困ったところはどんなことでしたか。また、どうして困ったのですか。

困ったところ：

どうして困った：

4. こぼさないためには、どんな工夫をすれば、よいとおもいますか。

5. アイマスクをして給食を食べよう。どんな様子だった？

6. 家の夕食でもやってみよう。（できる人はね。様子は裏に書いてみましょう）

7. もし、みんなに視覚障害があったら、どんな工夫があれば食べやすくなると思いますか。
また、こんなことは絶対されたくないことはありますか。

工夫：

絶対されたくないこと：

8. 「グルメ体験」の感想をかきましょう。

図４　ワークシートの例（体験学習２：生活体験の一部。実物はＡ４大）

⑶学習３（体験学習２：日常生活体験、５単位時間）【体験は筆者らが、発表は通常の学級の担任が各々主担当】

アイマスクを着用し目が見えない状態で様々な日常生活動作を行ってみる体験である。６グループ（各グループは５から６名）に分かれ、各グループが以下の日常生活動作から１つを選択して体験する。

①缶ジュースの中身を当てる
②衣服や靴の着脱をする　（写真２）
③お金の種類を当てる
④手渡されたものを絵に描く
⑤対面した相手のコップに水を注ぎ乾杯して飲む
⑥給食を食べる　（写真３－１，３－２）

写真２　自分の靴を探す

写真３－１　給　食
（間違って、隣の児童の牛乳に手を伸ばす）

写真３－２　給　食
（隣の児童の牛乳であることに気がつかないまま口に運ぶ。ふたがついていることにも気づいていない。中央下がこの児童の牛乳）

各グループ内で、アイマスクをして選択した「日常生活動作をする者」、「介助を試みる者」と「観察する者」とに分かれ、交代しながら全員が体験する。体験した感想や観察した結果についてワークシートに記入する。体験を通して実感した不自由さとそれを解決するための方法についてグループで話し合い、まとめる。

グループごとに体験を発表し不自由さ等について話し合った結果を、クラス全体に発表し、話し合う。

(4)学習４（体験学習３：歩行体験、３単位時間）【筆者らが主担当】

目の見えない状態で広い空間を歩いてみる体験と介助してみる体験である。通常の教室の約２倍広さがある学習室を利用し、全員が、アイマスク無し・有りの順で壁伝いに歩き１周する。次に、幅約1.5m長さ約20mのクランク状コースをアイマスクをして白杖無し・有りの順で歩く（写真４）。

いずれも、「歩行体験者」、「介助を試みる者」と「観察する者」とに分かれ、交代しながら全員が体験する。体験した感想や観察した結果についてワークシートに記入する。ワークシートに記入した内容を発表する（この体験では、安全確保のために、教頭や担任以外の教員も参加を依頼する）。

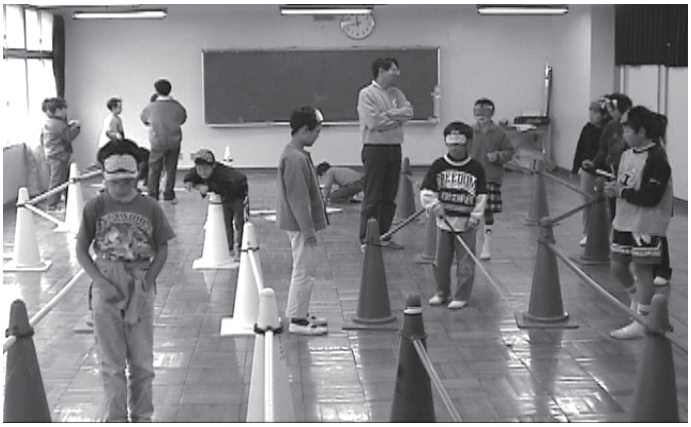


写真４　歩行体験

(5)学習５（調べ学習、２単位時間）【通常の学級の担任が主担当】

グループに分かれ、点字や盲導犬について文献やビデオ等で調べたり、点字ブロックについて実際に町を歩いて調べる。グループごとに発表する。

(6)学習６（ビデオレターの作成と視聴、２単位時間）【筆者らが主担当】

これまでの学習をふまえ、全盲の人に質問したいことを列挙し、代表の児童が質問を読み上げるビデオレターを作成する。筆者らが全盲のＣさんに協力を依頼し、ビデオを視聴してもらい、質問に回答してもらう。その様子をビデオに録画する。児童はそのビデオを視聴する。

(7)まとめ（作文作成、１時間）【通常の学級の担任が主担当】

全学習をふりかえり感想や疑問点を作文にする。

３．結果と小考察（児童の学習の様子と感想から）

(1)見えないことに起因する不自由さへの気づき

初めての視覚障害体験である学習２に関する児童の感想を引用する。

「アイマスクを付けた時私は、まっくらなところにいるみたいで、とてもこわかった。アイマスクを付けて折り紙を折った時、線もあってなかったし、時間もかかった。目の見えない人は、折り目やかどがわかるのかなと思った。」

このように、アイマスクを初めて着用した感想として「こわかった」「緊張した」等の記述が見られた。また、上記のように折り目や角のほか、「中心がわからない」という記述や、「折り紙がどこにあるかがわからなかった」などの記述があった。

児童たちは、普段意識せずに使っている視覚の役割に気づき、視覚が使えないことに起因する不自由さに気がつき始めた。

次に、学習３で日常生活動作をアイマスクを着用して体験した感想を以下に示す。

「目のみえない人はジュースをコップに入れるときや、花に水をあげたりするときとってもふべんで、すごくかわいそうだなあ、と思いました。」

「しかくしょうがい者は、買いたいかんジュースの特ちょうを知っていないといけないので、たいへんだと思いました。」

このように、日常生活に直接関係する体験の結果、視覚が使えないと不可能な事が多くなるといった認識を持つ児童が増えた。また、「かわいそう」「たいへん」など不自由さのみに焦点化された感想が多く見られるようになった。

⑵ 視覚に代わる感覚や機器の有効性への気づき

他方、児童たちは、学習３と４で体験学習を繰り返すうちに、不自由さを感じつつも、触覚など、視覚に代わる感覚の利用や白杖などの機器を使用することで不自由さを解決できることに気がついた児童もいた。そのような児童の感想を以下に示す。

「まず、プラスチックコップに、ちょうどよく入れることでした。プラスチックコップは、冷たさが感じるので、みんなうまくできました。ところが、ガラスのコップでやったら、冷たさを感じないので私は注意深くやったら、少なすぎでした。（中略）ゆびでたしかめると、ぴったりになりました（学習３⑤）。

この児童は、指をコップの内側に入れて水量を確かめる方法を考え出した。しかし発表を準備する際、「他児の指だったらいやだな」と気づいたり、発表時「お湯だったらどうするのか？」と質問されたりして、このアイデアは適当でないことを知った。コップに注ぐには「注意深くやる」ことしかなく、とても難しいことだと考えたようだった。しかし、その後、学習６で全盲の人が、コップの重さや注がれる水の音でわかると回答したことに児童たちは驚き、同時に納得していた。

次に、歩行体験の感想を示す。

「白じょうのない時、私は、コースから出てしまって、いろんな人に、右だ左だと言われ、わからなくなりました。白じょうを使ってやったら、コースからはみ出ないで上手にできました。」（学習４）

このように、白杖なしで歩行した時の失敗経験から、白杖という機器の有効性を感じ取った児童が何人もいた。また、この児童の場合、視覚障害者を介助する場合の留意点も気づき始めている。つまり、この児童は、一度に大勢の人が声をかけることによって、視覚障害者を混乱させる可能性があることを、体験から知ったと思われる。

⑶ 視覚障害のある人への支援についての気づき

学習５では児童たちはグループに分かれ、点字、盲導犬、点字ブロックについて調べ、発表しあった。点字について調べた児童の感想を引用する。

「図書館に行って、点字の本を借りてきてみんなで覚えようとしましたが、ぜんぜん覚えられませんでした。それなのにビデオを見ると、目のみえない人はスラスラ読んでいたのでびっくりしました。」

このように、身近にありながらも、未知であった点字などについて調べ、体験した結果を率直に報告している。

表４　Ｃさんへの質問

質問１　　☆まず、「歩く」ということに関してです

・物や人にぶつからないように歩くにはどんな工夫がありますか？

・階段を上ったり下りたりするときにはどこに気をつけるのですか？

・廊下や、町で角を曲がるときにはどうするのですか？

・壁も点字ブロックなど、なにもない広いところではどうやってあるきますか？

・大通りや人ごみの中とかで、杖がはじまで届かなかったり、人が多くて使えないときは　どうしますか？

・杖を落としたらどうしますか？

・家の中でも杖をもってあるきますか？

・横断歩道を渡るときにはどうするのですか。

・音楽のない横断歩道の時は「とまれ」はどうしてわかるのですか？

・道がわからないときはどうしますか？

質問２　　☆次に買い物のことです

・買い物で、お金を払ったりおつりをしらべたりするときはどうするのですか？

・買い物の時に、欲しいものはどうやって見分けるのですか？

・パックに入っているものはどうしますか？

・色鉛筆はどうやってみわけるのですか？

・駅で切符を買うときはどうしますか？

質問３　　☆次に食事や生活についてです

・料理を作るときに困ることはどんなことですか？

・食事をするときにどんな工夫がありますか？　　・箸はどうやってつかいますか？

・飲むときに困ることや工夫はありますか？

・着替えるときに、たんすの中から今日の洋服はどうやってきめるのですか？

・布団は一人でしくのですか？

・洗濯物を干すときの工夫はありますか？

・新聞はどうやってよみますか？

・テレビはよくみますか。ラジオのほうがいいですか？

・字を書くときにはどうしますか？ひらがなや漢字もかけますか？

・絵を描く時の工夫はどうしていますか？

質問４　　☆その他についてです

・杖はどこでかうのですか？

・杖を使っていて不便なことはどんなことですか？

・点字を覚えるのは大変でしたか？

・時刻はどうやってしるのですか？

・ボール遊びをするときの工夫はどんなことですか？

・折り紙をおったことがありますか？　　・トランプはどうするのですか？

・「宅急便でーす」といわれたけれど、ほかの人だったらどうするのですか？

・危険はどのようにかんじとっていますか？

・見えない生活に慣れてくると、不安な気持ちはなくなりますか？

・何が一番不自由ですか？

児童たちは、学習２から４によって視覚障害を疑似体験したからこそ、この調べ学習に意欲的に取り組んだと思われる。また、同時に、点字、盲導犬、点字ブロックの役割や大切さに気づくことができたと考えられる。

⑷ 全盲の人とのビデオレターでの気づき

全４学級の児童が挙げた質問項目を整理しビデオレターの原稿にしたものが表４である。Ｃさんの回答ビデオには、児童たちの質問への回答に加え、仕事風景や点字新聞を読む様子、折り紙を折る様子が収録されていた。児童たちは質問に対する全盲のＣさんの回答ビデオを見て、次のような感想を書いた。

「ビデオを見てびっくりしました。目が見えないのに折りがみではこをすらすらとつくっていました。」

「Ｃさんは仕事のとき、白杖をもたなくても歩けるのがすごいです。」

「点字新聞というのがあってみんなに読んでくれました。しかもわたしたちと同じくらいの速さで読んでくれました。」

このような感想や回答ビデオ視聴時の児童たちの様子から判断すると、折り紙を折ることができる、白杖無しでも歩くことができる、点字は墨字と同じかそれ以上の速さで読むことができる、という３点に児童たちは最も関心を抱き、率直に「すごい」と表現していた。見えなくてもできることがたくさんあることに気がついたと思われる。

⑸ 全体を通しての感想

Ｂ学級 31 名中欠席者を除く 29 名がまとめの作文を作成した。すべての作文から、児童一人ひとりがその子なりに、本授業のねらいである「視覚障害の知識や体験を通して、障害による不自由さと不自由さに対する生活上の工夫について知る」を達成したことがわかった。

さらに、６年間を通してのねらいを踏まえて、視覚障害のある人に対する気持ちの表現があるか、自分はどうしたいかについての表現があるか、の２点について検討した。

気持ちの表現があったものは 18 名であった。このうちＣさんについて、見えないにもかかわらず、いろいろなことができることを「すごいなぁ」と記述している者が 16 名、視覚障害のある人は「かわいそう」と記述した者が１名、自分たちは体験学習を楽しんだが「しかくしょうがいしゃはどう思っているのだろう」と記述した者が１名であった。

「目が見えないのに、○○ができるなんてすごい」という感想は、体験学習によって児童たちが目が見えないと不自由なことが増えることを実感していたからこそ出てきたものであろう。視覚障害のある人が独力でできる事は健常者のそれとそれほどかわらない。しかし、児童たちは、体験学習によって、様々なことができるようになるまでの視覚障害のある人の努力に、思い至ることができたのではないかと思われる。

さらに、障害のある人と出会ったとき自分はどうしたいかを表現したものが４名いた。そのうちの１名の作文の最後の部分を紹介する。

「Ｃさんは、私が折れない折り紙を、上手に折りました。わたしは、すごいなぁ、と思いました。目が見えなくてもたっきゅうをしているのだそうです。私は、目が見えなくても、できる事は、できるんだ、とすごく思いました。

目が見えなくてもできること、不便なことがあるんだな、と思いました。
もし勇気があれば目の見えない人を助けてあげたいな、そう思いました。」

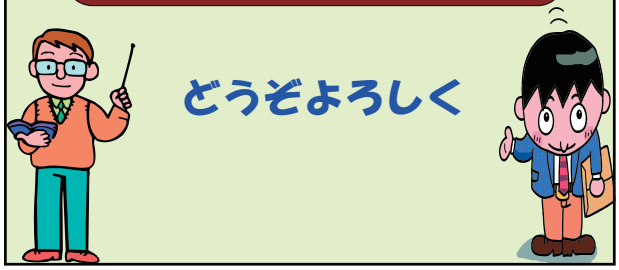
この児童は「助けてあげたい」という表現を使ってはいるが、「できる事は、できる」ということに気づいており、視覚障害のある人について適切な認識を持ち始めたと考えられる。このように、少数ではあるが、本授業６年間全体のねらいに接近できた児童もいた。

付記：本授業研究は、豊田弘巳、三浦八重美、石岡幸子、仏淵千枝子、杉井克子、荏原さち子の各教諭との共同研究によるものである。

視覚障害体験授業計画

時数	内 容		学習の流れ	用意するもの	場所
1	導入	学習のねらい及び視覚障害の基礎知識　疑似体験の説明	この活動のねらいと流れを知る（視覚障害体験と体験に基づいたやさしさについて考える）。目のはたらきやその障害についてみんなで考えてみよう。 全員がアイマスクをして折り紙を折ってみる。その体験から視覚の役割を認識する。	ppt	PC室
2	体験１	折り紙体験（全員）		折り紙、ワークシート、ストップウォッチ	
3	体験２	日常生活体験（6班にわかれて体験）とそのまとめ	①缶ジュースの中身を当てる ②衣服や靴の着脱をする ③お金の種類を当てる ④手渡されたものを絵に描く ⑤コップに水を注ぎ、乾杯して飲む ⑥給食を食べる ☆ワークシートに体験をまとめる。 ☆子どもたちがデジカメにその様子を撮影する。	アイマスク(ハンカチをはさむ)、ビデオカメラ、デジタルカメラ、①缶飲料、②着替え、③現金、④描画用具、⑤コップ、ペットボトル、⑥給食等	各教室
4					
5					
6	体験３	「白杖歩行体験」とそのまとめ	①壁伝い歩き体験：アイマスクをして室内を壁伝いに歩く。 ②白杖体験：アイマスクをして室内に設置したコースを歩く。白杖使用の有無で違いを体験する。 ☆ワークシートにまとめる ☆子供たちがデジカメにその様子を撮影する	ビデオカメラ、デジタルカメラ、安全管理者3名以上	学習室 体育館
7					
8					
9	調べ学習	調べ学習	これまでの疑似体験に基づき ①視覚障害についてわかったこと ②生活していくなかでの工夫について考え、調べる。 ③視覚障害の方に聞きたいことを決める ④調べたことを発表する準備をする	児童の疑問によって必要なものを準備する。 インターネットのリンク先などを提示する。	PC室 学級等
10					
11					
12	発表	発表会	グループごとに発表をする。発表を聞く		PC室 学級等
13	話合い	質問をまとめよう	子どもたちが相談をして質問をしぼる		学　級
14	対話	視覚障害のある人の話を聞こう	子どもたちが主体的に質問をし、話し合いをする		学習室
15	まとめ	作　文	全体を振り返って　わかったことや、やさしさについてを考え作文を書く。	作文用紙	学　級

みなさん
こんにちは！



どうぞよろしく

自己紹介

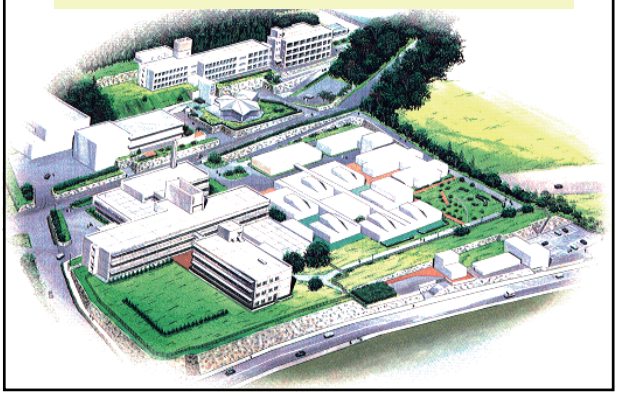
きこえの教室

豊田 弘巳

自己紹介

久保山 茂樹

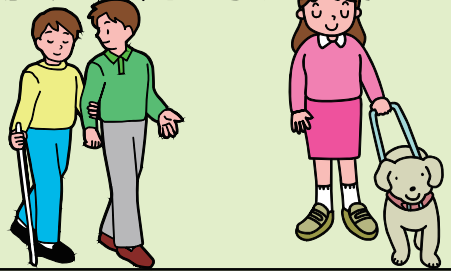
これが　研究所だ！



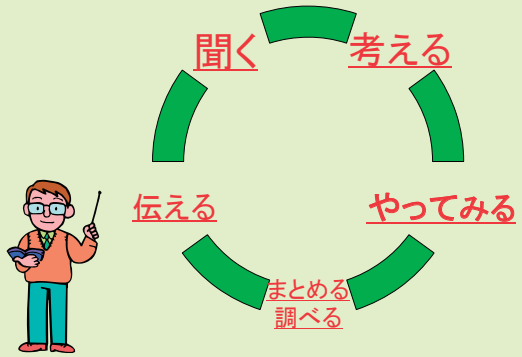
ことしの学習は？

視覚障害擬似体験

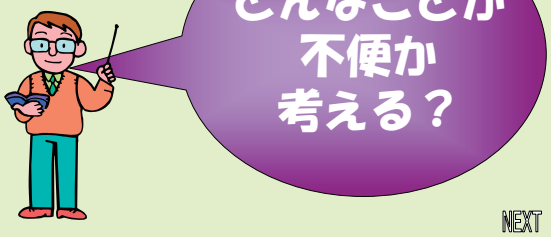
しかくしょうがいぎじたいけん



学習はこんなふうにすすむ



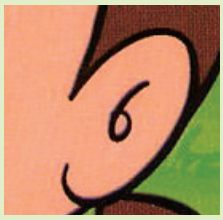
考える



NEXT

耳はどんな仕事？

し　ごと



NEXT

目はどんな仕事？

し　ごと

NEXT

見えない
視覚に障害がある
見えにくい

どんなことが困る？（1組）

・どこに、ものがあるかわからない
・階段とかで、ころびそうだ
・ものにぶつかる
・だれがいるか、わからない
・どこが、どこだかわからない

ほんとうに不自由か？
どんなふうに不自由か？
擬似体験
考える

やってみて
どんなことが
わかった？
考えた？

全員で擬似体験
おりがみ体験
アイマスク

まとめる
調べる
わかったこと
をまとめ
工夫をしらべ
よう

なにが不便
どこが不便
できること/できないこと
くふう・私たちができること
こうすればいい

たずねる
聞く
上野さんから
お話を聞いて
みよう？

学習の予定

1.目が見えないとなにが困る？
2.擬似体験を考えよう
3.擬似体験をしてみよう
4.わかったことをまとめよう。
　工夫をしらべてみよう
5.視覚に障害がある人と話をしよう
6.まとめ

学習のねらい

1．視覚障害擬似体験をしてみつけよう
「できること」と「できないこと」
→どんな、くふうでのりこえられるかな？

2．私たちが、視覚に障害がある人に
「できそうなこと」
はどんなことがあるか考えてみよう。

パソコンも使ってみよう

勉強したことがのってる
（グループのワークシート印刷）

リンクがあるよ

みんなに発表をみてもらえるよ

擬似体験
ぎじたいけん

発表
はっぴょう

グループ別体験
＆
全員体験
ぜんいんたいけん

グループ別体験

超能力お買い物体験
芸術家体験
ドレスアップ体験
あそんでみせるぞ体験

体験のルール

安全第一　あぶないこと禁止！

しぼりだせ！　アイデア！

（ワークシートは例）

伝えよう

どんなことをしたか？

どんなふうになったか

どうすればうまくいくか？

全員体験
ぜんいんたいけん

グルメ体験

白杖体験
はくじょう

先生おしえて体験

伝えよう

どんなふうになったか

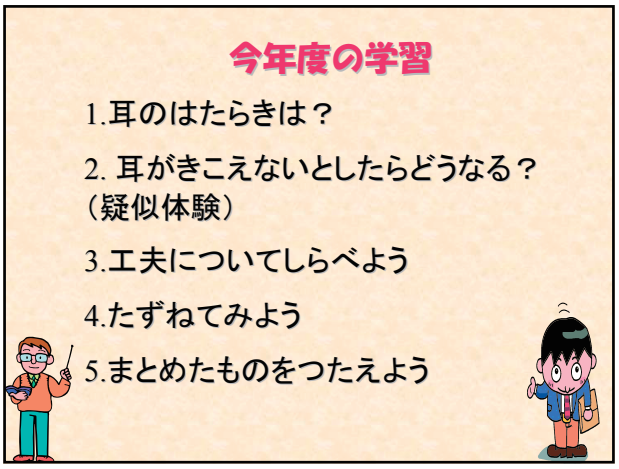
どうすればうまくいくか？

白杖歩行体験コース

聴覚障害体験授業計画

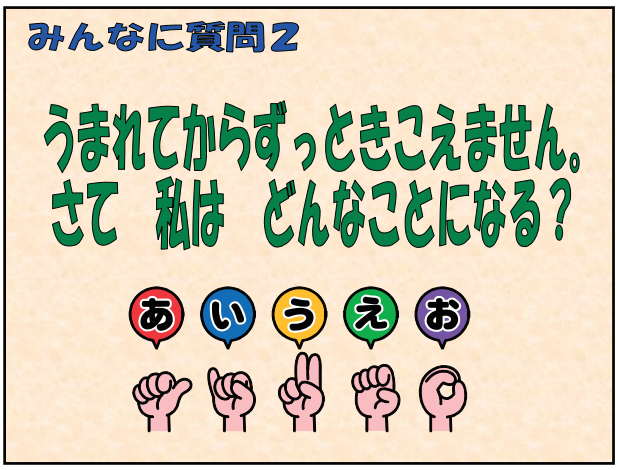
時	ねらい	主な内容	担当
1 ・ 2	・聴覚障害疑似体験学習の全体計画をする ・ゆいちゃんの作文を聞いて難聴者の発音をする ・聞こえの仕組み、「ことば」を覚える課程について考える ・聴覚障害疑似体験セットについて説明する	・ゆいちゃんの作文 （発音をどう感じたか、なぜこうした発音になったか） ・成長記録をみながら言語発達について知る	豊田 久保山
3 ・ 4	・疑似体験セットをつけて授業を受ける。 ・音情報が入らない状態の不便さや気持ちについて知る	・実際に担任が授業を行う ・２回にわけ、子ども同士で様子を観察 ・音情報が入らないことについて話し合う。どんなことになるだろうか？	担任 豊田 久保山
5	・「少しだけきこえる」体験をしてみよう	・ほんの少し聞こえる状態で１時間の授業をうけ、休み時間を過ごす。 ・その様子をまとめる	担任 豊田 久保山
6 ～ 8	・調べ学習　耳の不自由な人の為にはどのような工夫があるだろう。 ・工夫で解決できないだろうか （バリアフリー→ユニバーサルデザイン　心のユニバーサルデザインへ） ・インターネットを使おう（ネチケットについて）	・どのような工夫があれば便利か考える。 ・ネットの使い方とマナーについて	担任
9 ～ 12	・パワーポイント（ひな形）を使って ・調べたことを文字にかいてみよう ・質問を文字にかこう	・ローマ字入力の練習。	豊田
13	・聴覚に障害がある人に色々とお話を伺う ・聴覚に障害がある人の生活の工夫について知る	・聴覚に障害がある人に来て頂き、お話を伺う	担任豊田 久保山
14 15	・自分たちが調べたことをみんなにつたえよう ・お話を聞いて考えたことを伝えよう	・パワーポイントを用いてプレゼンテーション	
以降	◎自分の回りには色々な人が存在することに気づく。人それぞれに「こまったなあ」をもっている ◎その中には障害がある人もいることを知る ◎疑似体験を思い出しその人のことを考えてみる ◎バリアフリー　→　ユニバーサルデザイン 心のユニバーサルデザインへ	クラスの状況に応じて、調べ学習や、意見交換を行えるとよいと考えます。学習の素材を言語障害と難聴に絞っているが、誰にもやさしい誰もがやさしい学級・学校作りの素材にして頂けることを願います。	担任

やさしさってなんだろう
こどもたちは考えている
やさしさ調べ隊


今年度の学習
1.耳のはたらきは？
2. 耳がきこえないとしたらどうなる？
（疑似体験）
3.工夫についてしらべよう
4.たずねてみよう
5.まとめたものをつたえよう

耳の不自由な人
ふじゆう
こまったなあ！
手話

みんなに質問
とつぜん聞こえなくなりました。
さて　私は　どんなことになる？


みんなに質問２
うまれてからずっときこえません。
さて　私は　どんなことになる？
あ い う え お

ちょっと聞いてね
ゆいちゃんの作文

きこえの教室に通っていたともだちの作文

わたしは、耳が遠いので、ほちょうきをつけていますが、先生やともだちの話が、よく聞きとれないことがたくさんあります。

とくに、ほうそうの声はわかりません。
先生のお話も、先生が黒ばんの方をむきながらだと、聞きとれません。

でも、そんなときには、ちかくのともだちが、ゆっくり話して教えてくれるので、とてもたすかります。

先生もなるべく、わたしの顔を見ながら話してくださるので、よくわかります。

一番、にが手なのは、学きゅう会のような話し合いの時です。

つぎつぎと、いけんが出されても、わたしには話し合いのないようが、よくわかりません。

出されたいけんを黒ばんに書いてもらえたら、わたしも、話し合いにさんかできると思います。

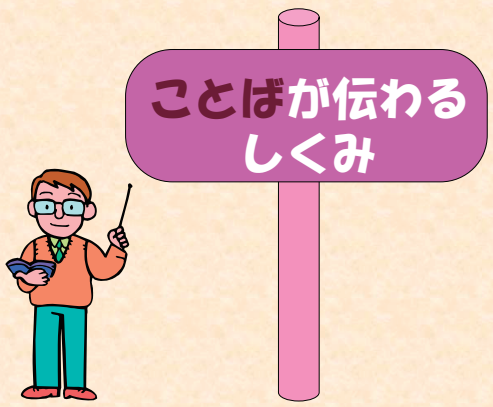
プールの時は、ほちょうきをはずしているので、ふえの音なども聞こえません。

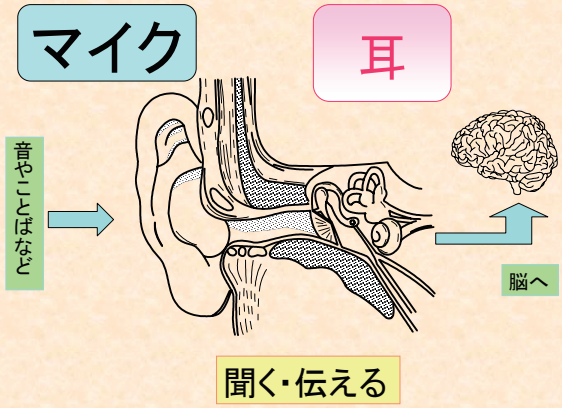
目に見えるようなあいずをしてもらえると、みんなと同じように、こうどうすることができます。

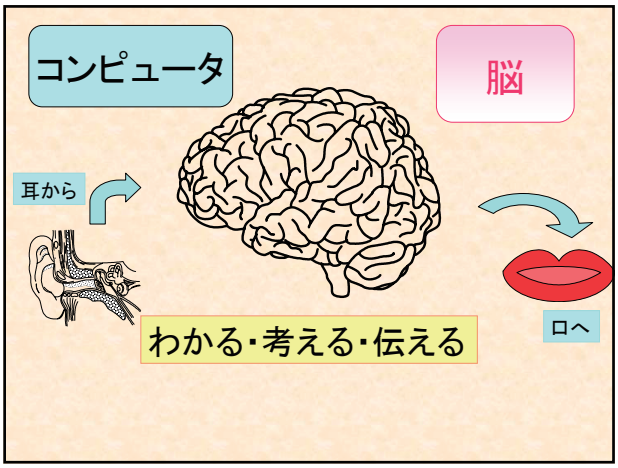
わたしが、みんなの前で教科書を読んだり、話をした後、
「わたしは、はつ音が悪いから・・・・・・」
と言うと、

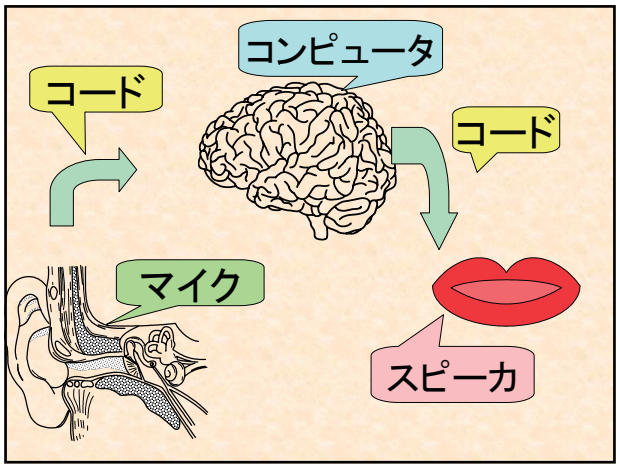
ともだちが「だいじょうぶだよ。よくわかるよ。」とはげましてくれるのが、うれしかったです。

わたしが、わからなくて、こまっているときにも、めんどうくさがらずに、教えてくれたり、みんなと同じように、なかよくしてくれるので、まいにち、楽しく学校にかようことができます

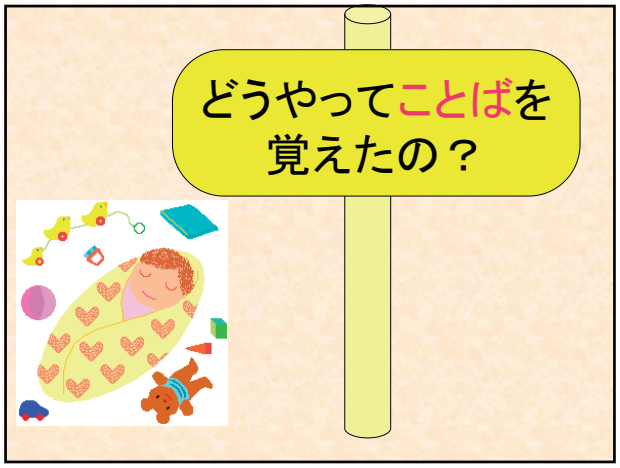




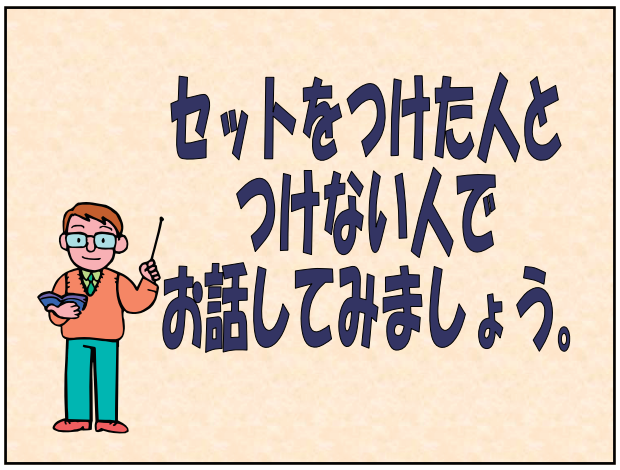

コンピュータ
脳
耳から
口へ
わかる・考える・伝える


コンピュータ
コード
コード
マイク
スピーカ

パパ！って
言うまで
Go DVD


どうやってことばを
覚えたの？

耳がきこえにくい
ことばがわかりにくい
疑似体験
ぎじたいけん
こまったなあ！


セットをつけた人と
つけない人で
お話してみましょう。

見ていた人

聞こえにくい人と話すとき
どんなことが
こまった？

担任の先生に
してほしい　くふうは？

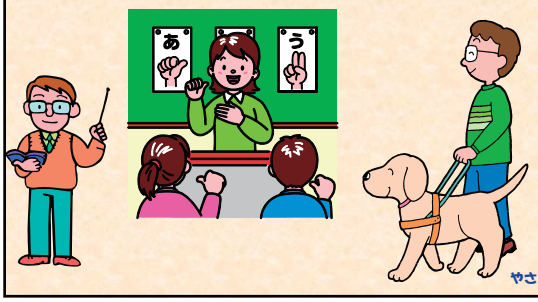
担任の先生にも
うかがってみよう！
授業は？？

あると便利なものは？
こんなものあったらいいな？

車いす体験授業計画

時数	ねらい		内　　容	指導担当	
				通常担任	通級担当
2	Aブロック	学習計画を知る 車いすに関する基礎的な知識を知る	①本年度の学習のねらいと概要、学習の進め方 ②車いす操作に関する基礎知や注意事項	△	○
約1週間		①一日車いす生活体験 ②車いす介護体験 ③教室に車いすが常にいる生活を味わう	①登校時より下校時までトイレ以外は車いすからおりないで生活する。 ②車いす体験の補助を行い、どんな方法が適切か、どのような施設設備が必要かなどを考える。 ③車いすで生活する人が身近にいるとどのような気持ちになったりどのような事がおきたりするか　感じ取る	○体験内容の確認など	○車いすの手配など
1		車いす体験に関するまとめを行う	車いす体験や介護の体験などをもとに、車いすでの生活について自分の言葉で　気持ちや不自由さについてまとめておく（ワークシート）	○	△
2	Bブロック	障害のある人について知る	テレビ放映されたものや、本などによって車いす利用者だけでなく、色々な障害がある人が色々な生き方をしていることを知る	○(教材用意等)	△
2		車いす利用者との話し合い	クラス毎に一人のゲストを招き、体験で得た疑問や知識をもとに尋ねたり話し合ったりする。給食などもともにし、交流を深める	○(話し合い素材や道具の用意等)	○(車いす利用者への連絡調整)
2		すみよい町づくり、人と人とのつながりなど、自分の考えをまとめる	交流を通して自分の意見をさらに内面かさせ、6年時の学習につなげるため、車いすの人たちにとって住みよい町づくり、人作りについて自分の考えを記しておく。	○	△

「やさしさ」の学習



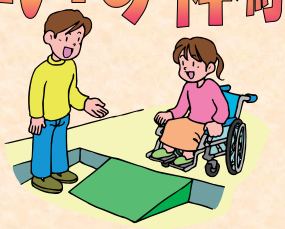
やさしさ5年

擬似体験をしながら やさしさ発見

「やさしさってなんだろう？」

やさしさ5年

さて、今年は・・ 車いす体験



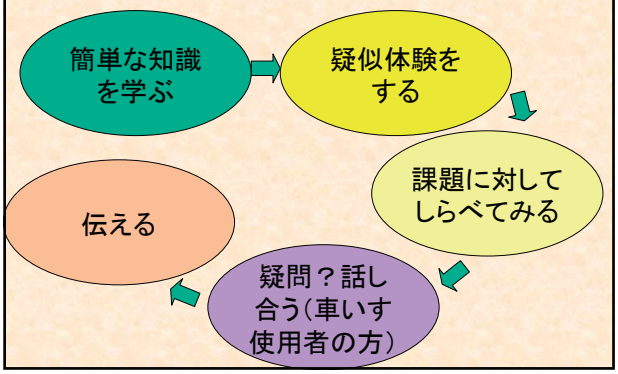
やさしさ5年

学習の予定

1.学習することのお知らせ
2.車いすをながめてみよう
3.車いすで生活してみよう
4.車いすの人と一緒にすごしてみよう
5. 工夫でのりきろう
7. ユニバーサルデザインについて考えてみよう

やさしさ5年

これからの学習



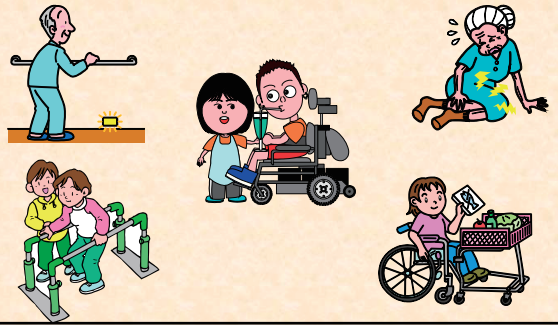
学習をはじめるまえに・・

質問

車いすについてしっていることは？

やさしさ5年

車いすを必要としている人は？



車いす体験のポイント

ふだんの生活で？

ドアは？

操作は？

水飲み場は？

長距離は？

階段は？

段差は？

トイレは？

やさしさ5年

車いす体験のポイント

気持ちは？

一日中すわっていると？

助けてもらった時の気持ちは？

助けてあげた時の気持ちは？

助けをたのむ時の気持ちは？

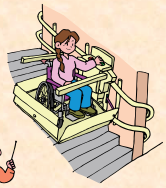
やさしさ5年

車いす体験のポイント

工夫は？

こんな時にどうすればいいのか？

なにがあればいいのか？



やさしさ5年

車いすにのる前に

知っておくこと

気をつけること

やさしさ5年

ただのるだけではなく・・・

「もしも、・・・
私がもしこれから　車いすを利用する
生活になった」

・感じたこと、想像したこと
・調べてみたいこと　　を　発表

体育館試乗会

約束：全員が体験すること

1．まっすぐ進んでバックしてくる
2．決められたコースを進む
3．体育館を一周する

自分で進む　1．3
補助をして進む　2（補助の約束）

試乗コース

1．まっすぐ進んでバックしてくる
自分で進む、バックする。

帰りがけに途中でUターンしてみる

体育館試乗会

2．決められたコースを進む

コーンの間を車いすですすむ。
できないときは　声をだして介助してもらう。
手しか　使えません。

体育館試乗会

3．体育館を一周する

基本的には　自分で進む
疲れたら　ヘルプをしてよい

休まないで連続してすすむ。

ホームページで調べてみよう

検索
リンク集

やさしさ5年

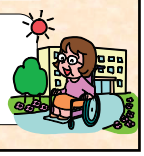
やさしさっていっぱい 5年生 いっぱい

課題ワークシート

名前:

私の課題

なぜ、この課題を選んだか？



私の課題は、今はこんな状況！

私が課題を調べる方法

調べるために必要な道具や場所など

調べた！今はこんなようす！

NO.

わたしなら　こう考える、こうする！

なにで考える？（○でかこむ）

1. 医学の力でかえる　2. 道具でかえる　3. 人のやさしさでかえる

高齢者体験授業計画

時数	ねらい		内　　容	指導担当	
				通常担任	通級担当
		今後の学習計画を予測する	自分が考える現在の「やさしさってなんだろうな？」を文章化する	○	web形式
2	Aブロック	学習計画を知る	本年度の学習のねらいと概要、進め方等について話を聞く	△	○
		高齢者に関する基礎知識を知る	高齢者の定義、割合、身体的変化、心理的変化など、統計を基に話を聞く		○(久保山先生の講義)
1		既存の体験を基に自分で体験を組み立てる	視覚（3年）聴覚（4年）車いす（5年）で行ってきた体験をもとに、自分で、高齢者体験グッズを見ながら　疑似体験のねらいや数種類の疑似体験内容を考える	○体験内容の確認など	○体験グッズの用意など
1日		一日体験を行う	計画に基づき、登校時より下校時まで疑似体験を行う	○	
1		疑似体験に関するまとめを行う	自分の行った体験をもとに、高齢者ができること　しにくいこと等についてまとめておく（ワークシート）	○	△
3	Bブロック	ディケア施設の存在を知り見学をし通所高齢者との交流をする	ディケア施設の概要について学び、自分たちの用意した話し合いの素材や道具をもって　通所している高齢者との話し合いの時間を持つ	○(話し合い素材や道具の用意等)	○(デーケア施設との渉外)
2		学区内にある老人会の方々との交流	児童５人に対して一人の高齢者の割合で話合いを行う。鶴川地区の変化の様子や、住みよい町についての話などへ発展させる。	○(話し合い素材や道具の用意等)	△(管理職との調整)
5		自分の課題を調べ、自分の考えをまとめる	自分が高齢者になったらどうするか、またどうしてほしいか。・高齢者が生き生きと生活できる町とは？・今の自分にはどんなことができるか？自分の意見や考えをパワーポイントを使ってまとめる。	○	△
1		発表する	プレゼンテーションを行う	○	△

小学校の卒業が間近になりました・・・

今年は
高齢者疑似体験

今の私が考える
「やさしさってなんだろうな？」

やさしさってなんだろうな？

「やさしさってなんだろうな？」を定義してみよう

学習のねらい　1

学習をふり返り

高齢者疑似体験（6年）
車いす体験（5年）
聴覚障害疑似体験（4年）
視覚障害疑似体験（3年）
ことばあそび（1，2年）

「やさしさってなんだろうな？」をもう一度　見直してみよう。

やさしさってなんだろうな？

学習のねらい　2

高齢者疑似体験（6年）

1．疑似体験を通して　高齢者について学ぼう

2．高齢者の方々とはなしあってみよう

3．自分の考えをまとめよう

「やさしさってなんだろうな？」を定義してみよう

「やさしさってなんだろうな？」をもう一度みなおしてみよう

やさしさってなんだろうな？

学習の進め方

疑似体験を通して
高齢者について学ぼう

1.高齢者についての基礎知識

2．高齢者疑似体験の企画書作成と一日疑似体験の実施

3．体験結果のまとめ。（パワーポイント、ワード、手書き　デジカメなども使って）

高齢者疑似体験企画書

6年　組　名前

高齢者疑似体験を行うにあたって	1．登校時より下校時までのまる一日疑似体験をおこなうことを基本とします。 2．従って、あまり多くの装具をつけると、不便さを超えて苦痛を味わうことになります。 3．二つくらいの装具で体験しましょう。 4．安全第一です。階段や歩行　運動など気をつけて。もちろん周りの人もその人を高齢者だと思って、気配りをしてください。高齢者への思いやりの練習です。
疑似体験で感じてみたい、変化	擬似的に低下させる能力：視覚・聴覚・触覚・体の変化（動き　制限）・記憶・集中力 どのような場面でそれらの能力が支障となると考えているか？
そのための方法	どのような　装具を　用いるか？ 装具以外に　お年寄り扱いをされることに対してどう感じるか？
記録の取り方	後でみんなに発表するには　どのような記録をどのような方法で取っておくか？ （基本的にはパワーポイントを使って、疑似体験の様子をまとめて下さい。）

やさしさってなんだろうな？

学習の進め方

高齢者の方々と
話し合ってみよう

1.デーケア施設について

2.デーケア施設訪問
見学と話し合い

3.地域老人会の方々との
話し合い

4.体験結果のまとめ。（パワーポイント、ワード、手書き　デジカメなども使って）

学習の進め方

デーケア施設での話し合いのポイント

1.自己紹介
2.楽しくお話をするための工夫
　話題、遊び、相手の様子や
　立場を想像して変化対応
3.余裕があるなら、
　「私たちにしてほしいこと」
　「高齢者がすみよい町」に
　ついての話題ではなす。

学習の進め方

地域老人会の方々との話し合いのポイント

1.自己紹介
2.楽しくお話をするための工夫
　話題、遊び、相手の様子や
　立場を想像して変化対応
3.できるだけこちらを重点に
　「私たちにしてほしいこと」
　「高齢者がすみよい町」に
　ついての話題ではなす。

高齢者疑似体験でまとめること

1．疑似体験を通して　高齢者について新たに学んだこと。

2．高齢者の方々と話しあってわかったこと。新たに学んだこと。

3．高齢者に対して「自分は何ができるか」「高齢者も住みやすい町」とはどのような町なのかあなたの意見を述べる

最後の最後

学習をふり返り

「やさしさってなんだろうな?」を定義してみよう

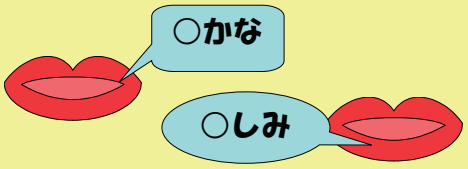
高齢者疑似体験（6年）
車いす体験（5年）
聴覚障害疑似体験（4年）
視覚障害疑似体験（3年）
ことばあそび（1，2年）

「やさしさってなんだろうな?」をもう一度　見直してみよう。

今までのぎじ体験

ことばの障害ぎじ体験

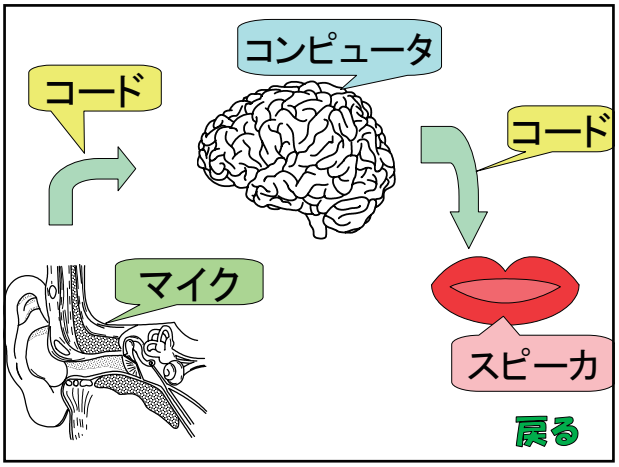
さぬきのしりとり



戻る

難聴ぎじ体験

口ぱくビデオ



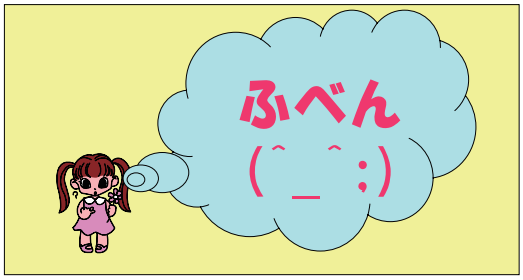
戻る

視覚障害ぎじ体験

戻る

車いすぎじ体験

体験してみると



戻る

基礎知識

高齢者について

基礎知識

1. 高齢者の人口は？

2. 年をとるって？
   ① からだ の 変化
   ② まわり の 変化
   ③ こころ の 変化

3. 高齢者も・・・

基礎知識

日本の人口は

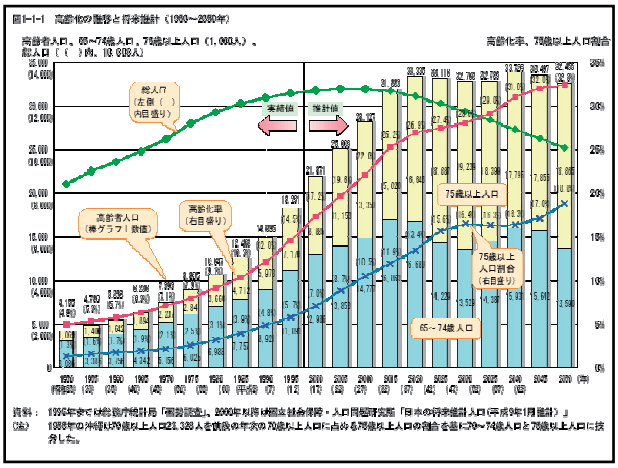
127，470，000人

高齢者（65歳以上の）人口は

23，620，000人

高齢者の割合は

18．5% ＝ 5．4人に1人



高齢者体験

体験内容の例えば・・

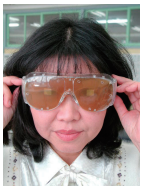
授業をうける ほかにも、アイデア次第で、
いろいろな体験ができる・・・

標準的な疑似体験内容

視覚	弱視ゴーグル
聴覚	聴覚障害セットの利用
触覚	軍手
手足	おもり（両手足　片方だけでも） ひざ（片方のみ）・ひじ（利き手片方）
移動	車いす（3台あります）

弱視

弱視ゴーグルをかけて、
廊下をあるく。
国語辞典をひく。
細かい字を素早く読む。



難聴

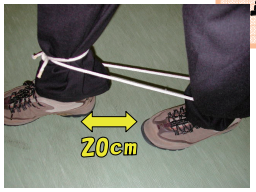
難聴疑似体験セットをつける。
友達がひそひそ話をするとどんな気持ち？
ひそひそ声の指示を聞く。
ひそひそ声でしりとり。

触覚

手袋をしたまま、
財布のお金を素早く出す。
国語辞典のことばをひく

歩行

1歩で約20センチ
1分間に約50歩。
友達と一緒にあるいてみよう。正門から教室の机まで。



人混み

弱視メガネや膝がよく動かない装具をつけて、休み時間の廊下をあるいてみよう。
予測できない方向や場所からいきなりたくさんの子どもたちがでてくる。

体験グッズ

	goods	数
1	足首おもり(1kg)	16
2	手首おもり(0.5kg)	22
3	軍手	6足
4	弱視ゴーグル(完成品)	7
5	ひざ拘束	6
6	ひじ拘束	6
7	足ひも	7
8	聴覚障害セット	10
9		
10		

平成 15 年度～平成 17 年度
科学研究費補助金（若手研究（Ｂ））研究成果報告書
通常の学級の児童が障害について学び理解を深めるための
教材と学習プログラムの開発
（課題番号：１５７３０４１０）

平成 18 年３月印刷・発行
研究代表者　久保山茂樹
発　　行　独立行政法人国立特殊教育総合研究所
横須賀市野比５－１－１
〒239-0841　電話 046-848-4121
URL　http://www.nise.go.jp/